

五和町史資料編（その6）

じょう こ ば じょう あと
城 木 場 城 跡

熊本県天草郡五和町大字城木場字南風ノ元はまののもと所在の中世城跡

1997年

熊本県天草郡五和町教育委員会

発刊のことば



町内に確認されている5箇所の中世城跡のうち、平成6年度の下内野城跡、7年度の三川城跡の発掘調査報告書に続き、このたび、城木場城跡の発掘調査報告書を町史資料編(その6)として、発刊することができました。

これは、中世城跡の発掘調査報告書としては、3冊目となるもので、先に調査した下内野城跡、三川城跡との関連付けが、より明確化されるのではないかと期待しているところであります。

発掘調査にあたりましては、町史編纂委員長の鶴田倉造先生を調査総括として、執筆委員の大田幸博先生等によって調査が行われ、多くの地元関係者の御協力をいただきました。ここに改めて、御礼を申し上げます。

本報告書が、下内野城跡、三川城跡の調査報告書と共に、中世史を研究する方々の時代考証の基礎史料となることを希望し、さらに、町民の皆様の愛郷心が益々深まることを祈念しまして発刊のことばといたします。

平成9年3月31日

五和町長 伊藤山陽

序 文

このたび、町史資料編(その6)として城木場城跡の発掘調査報告書がまとまりました。

城木場城は、城木場地区にあった丘城で、内野川流域に存在した3箇所の城の内、最上流域に位置し、志岐氏の出城として築かれたといわれています。

先の下内野城跡、三川城跡の発掘調査に続き、今回も詳細な調査ができましたことは、天草の中世史を研究する上で、大変貴重な文献となるものであります。

調査にあたっては、町史編纂委員長の鶴田倉造先生を調査総括として、執筆委員の大田幸博先生等によって調査が行われ、大きな成果をあげることができました。また、地元の土地所有者の方をはじめ、多くの関係者の方々に御協力をいただきましたことを改めて感謝申し上げます。

本報告書の発刊によって、郷土に対する理解が益々深まることを祈念いたします。

また、付録として鬼池・御領・二江・下内野・井手各地区の小字小名一覧を添付しておりますので、御活用いただければ幸いです。

平成9年3月31日

五和町教育長 田 中 典 明

例 言

1. 本書は、熊本県天草郡五和町教育委員会が、町史編纂事業の一環として、平成8年度に実施した発掘調査、測量調査、文献調査の報告書である。報告書は、五和町史資料編(その6)にあたる。
2. 調査を実施した遺跡は、五和町大字城木場字南風ノ元に所在する中世城跡の城木場城跡で、調査は町史編纂委員長の鶴田倉造氏を中心に、執筆委員の大田幸博氏と町史編纂室で実施した。
3. 出土遺物は五和町教育委員会で保管している。
4. 出土遺物の整理については、佐賀県立九州陶磁文化館学芸課長の大橋康二氏から指導を受けた。
5. 出土遺物の実測と製図、遺構図面の整理と製図は、石工みゆきさんと溝口真由美さんが行った。
6. 本書の執筆は、大田氏と鶴田氏が行った。第1章第2節は、町史編纂室の池崎 剛(参事)が担当した。
7. 本書の編集は、大田氏と鶴田氏が統括し、実務は溝口さんと町史編纂室が行った。
8. 本書の付録として、鬼池・御領・二江・下内野・井手、各地区の小字小名一覧を別添した。

なお、上野原・荒河内・城木場の小字小名一覧は、五和町史資料編(その5)『三川城跡』(平成7年3月)の付録として別添している。

【調査員】鬼池地区：宮崎 生 宮崎照志

御領地区：山本 繁

二江地区：勝木康雄 山田義光

下内野・井手地区：岩崎清明 長島 悟

上野原・荒河内・城木場地区：本多 隆 山本 繁

本文目次

第Ⅰ章 調査の概要	1
第1節 調査の組織	1
第2節 調査の進展	1
第3節 五和町の概要	2
第4節 五和町の沿革	6
第5節 城木場地区について	7
第Ⅱ章 調査の成果	9
第1節 城木場城跡の測量調査	9
第2節 城木場城跡の発掘調査	31
第Ⅲ章 出土遺物	39
第Ⅳ章 まとめ	54
【肥後国一慶長四年江戸江差上候御帳之扣】に見える天草地区の中世城跡	57
【巻末】 付論 圓覚寺関係記録 城木場村庄屋金子家累代 松山家関係記録	
【別添付録】 1. 大字鬼池・大字御領地区 小字小名一覧	
2. 大字二江・大字下内野・大字井手 小字小名一覧	

挿図目次

第1図 五和町位置図	2	第8図 城木場城跡測量図②	20
第2図 五和町地形図と城跡分布図	3	第9図 城木場城跡測量図③	21
第3図 城木場城跡測量図①	8	第10図 城木場城跡測量図④	22
第4図 城木場城跡周辺地形図	10	第11図 城木場城跡測量図⑤	23
第5図 城木場城跡全体測量図	13	第12図 城木場城跡測量図⑥	24
第6図 城木場城跡グリッド設定図	17	第13図 城木場城跡測量図⑦	25
第7図 城木場城跡測量図①	19	第14図 城木場城跡測量図⑧	26

第15図	城木場城跡測量図⑨	27	第23図	8トレンチ実測図	38
第16図	城木場城跡測量図⑩	28	第24図	出土遺物実測図①	41
第17図	城木場城跡測量図⑪	29	第25図	出土遺物実測図②	44
第18図	城木場城跡測量図⑫	30	第26図	出土遺物実測図③	47
第19図	主郭周辺測量図①	31	第27図	出土遺物実測図④	50
第20図	主郭トレンチ設定図	32	第28図	礎石実測図	52
第21図	2トレンチ実測図	35	第29図	出土石器実測図	53
第22図	主郭周辺測量図②	37	第30図	天草地区の中世城跡	59

表 目 次

第1表	五和町所在の中世城跡一覧	5	第9表	出土遺物観察表⑤	46
第2表	建物1 礎石抜取穴計測表	33	第10表	出土遺物観察表⑥	48
第3表	建物2 柱穴計測表	34	第11表	出土遺物観察表⑦	49
第4表	建物3 柱穴計測表	34	第12表	出土遺物観察表⑧	51
第5表	出土遺物観察表①	40	第13表	出土遺物年代別分類表	53
第6表	出土遺物観察表②	42	第14表	天草地区の中世城跡一覧①	59
第7表	出土遺物観察表③	43	第15表	天草地区の中世城跡一覧②	60
第8表	出土遺物観察表④	45			

写 真 図 版

図版1	城木場城跡遠景（北側より）	62	図版11	主郭-①（1トレンチ）	67
図版2	城木場城跡遠景（東側より）	62	図版12	主郭-②（4トレンチ）	67
図版3	2トレンチ全景（南西側より）	63	図版13	主郭-③	68
図版4	建物1（南西側より）	64	図版14	丘頂ライン（野首地形）	68
図版5	建物1（北東側より）	64	図版15	出土遺物①	69
図版6	建物2（北東側より）	65	図版16	出土遺物②	70
図版7	建物3（南東側より）	65	図版17	出土遺物③	71
図版8	8トレンチ全景	66	図版18	出土遺物④	72
図版9	枕列（柱穴内に石が混入）	66	図版19	出土遺物⑤	73
図版10	枕列（柱痕）	66	図版20	礎石	73

第Ⅰ章 調査の概要

第1節 調査の組織

調査主体	五和町教育委員会
調査責任者	田中典明〔現五和町教育長〕 岩崎直志〔前五和町教育長〕
調査機関	五和町史編纂室
調査総括	鶴田倉造〔町史編纂委員長〕
調査関係者	大田幸博〔町史執筆委員・熊本県教育庁文化課主幹〕 山本 繁〔町史編纂委員〕 猪飼隆明〔町史編纂委員・熊本大学教授〕 (故)平田正範〔町史編纂委員〕
協力者	黒田裕司〔三加和町教育委員会〕 村崎孝宏〔熊本県教育庁文化課〕 大橋康二〔佐賀県立九州陶磁文化館学芸課長〕
文化財保護委員	宮崎照志 山田義光 中井國之 長島 悟 本多 隆 山下末則 (前)長野 潮
地権者	岩崎良弘 岩崎銀之丞 岩崎幸弘 岩崎敏朗 岩崎立志 岩崎 稔 岩崎松雄 岩崎安男 金子佳子 岩崎直正 岩崎サキエ 岩崎 徹 岩崎 誠 岩崎宗人 岩崎カズヨ 喜多哲郎 岩崎孝司 岩崎秀隆 岩崎辰男 岩崎 興 岩崎國廣 岩崎一吉 岩崎賢一 岩崎 悟 松下幸利 岩崎 正 岩崎アキノ 岩崎伊佐雄 小井手三郎 佐々木満則
調査事務局	〔五和町史編纂室〕 井上英二〔室長〕 池崎 剛〔参事〕 泉 喜代一 林 弘美
報告書作成	鶴田倉造 大田幸博 石工みゆき 溝口真由美
整理作業	林 枝三
発掘従事	樋口トミエ 梅本千鶴子 城下ツタエ 井上ウメ子 岡部キヨミ 福島シゲコ 鳥羽瀬ユリコ
伐採作業	森田洋介 天草森林組合

第2節 調査の進展

〔1〕 五和町では、平成5年から町史編纂事業に取り組んでいる。この間、町史編纂室では、中世部会の活動の一環として、町内に所在する中世城跡群の発掘調査と測量調査に取り組んできた。平成5年度に作成した年次計画書を元に、平成6年度は下内野城跡、平成7年度は三川城跡、平成8年度は城木場城跡の調査に取り組んだ。これらは、内野川流域に所在する中世城跡で、下流域から上流域へ順次、調査を進めてきた。成果については、年度末に町史資料編として調査報告書を刊行してきた。

(2) 平成8年度は、城河原地区の城木場城跡の調査を実施した。発掘調査は、鶴田倉造氏(町史編纂委員長)を中心に、大田幸博氏(町史執筆委員)らが、5月のゴールデンウィークを利用して行った。測量調査は、年末から年明けにかけて集中的に行った。調査区は、竹や雑木、草の茂る荒地で、調査には多くの困難が伴ったが、地元の方々の協力を得て、無事に終了することができた。

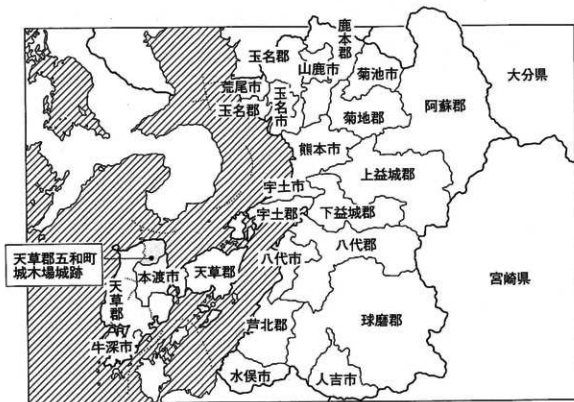
報告書作成は、調査と並行して実施したが、遺物整理、図面整理などの実務作業は、石工みゆきさんと溝口真由美さんが担当した。

〔池崎 剛〕

第3節 五和町の概要

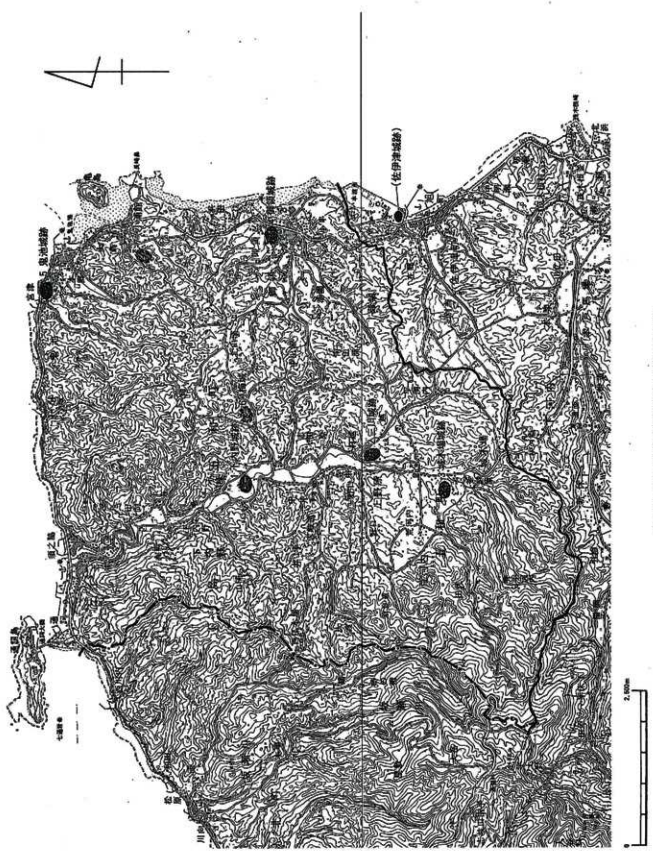
(1) 天草下島の北東部に位置している。行政域では、西に苓北町、南東は本渡市に接しており、北は海峡の早崎瀬戸を挟んで長崎県南高来郡口之津町と相對している。この口之津町へは、鬼池からフェリーが就航しており、鷹仙と天草を結ぶ観光拠点の一つとなっている。面積50.04㎢、人口11,529人、世帯数3,519戸(平成9年3月現在)。

地形的には、西部に山地があり、内陸部に低丘陵地が広がっているが、その間を内野川流域に代表されるように、いくつもの開析谷が細長く延びている。一方、沿岸部の北縁は丘陵端がそのまま海岸線となって有明海に面している。東部は比較的平野が広がっている。海岸線沿い



第1図 五和町位置図

圖 2 國參第一條(四甲分給)第七圖(北陸)第五



番号	城名	所在地	文献・城跡関連地名	現地形・立地	調査
1	下内野城 (小峯地区)	大字 下内野 字 城山	〔文献〕 慶安四年の 差出。 〔地名〕 城跡地に城 山(みけ)と いう字名。	〔現地形〕 丘陵地・畑地 〔立地〕 内陸部を流れる内野川の中 流域にある。 城跡は、内野川の大蛇行内 に納まる。 南側からの眺めは、インパ クトがある。	〔調査〕 平成6年 〔城域〕 全長217m 〔城の実年代〕 上限：14C 下限：16C後半～17C前半 〔主な遺構〕 掘立柱建物跡1棟・土塁・堀切
2	三川城 (上野原城)	大字 上野原 下野原 中野原	〔地名〕 麓に城下 (しほ)とい う字名。	〔現地形〕 丘陵地 山林・畑地・貯水池 〔立地〕 内野川の上流域にある。 城跡は内野川と打越川との 合流地点内に納まる。 内野川の左岸では、近くで 平川も合流している。 遠目には山の様に見える、特 に南側からの眺めはインパ クトがある。	〔調査〕 平成7年 〔城域〕 全長319m 〔城の実年代〕 上限：14C後半～15C 下限：16C後半～17C前半 〔主な遺構〕 掘立柱建物跡2棟・土柱・堀切 斜面部の削り落とし。 先端部の高台。
3	城木場城	大字 城木場 字 南風ノ元	〔文献〕 慶安四年の 差出。 圓覚寺関連 記録。 〔地名〕 城跡地に城 の尾(しほ)と いう小名。	〔現地形〕 丘陵地・墓地 〔立地〕 内野川の最上流域にある。 城跡の北東側で、内野川に 荒川が合流する。 藁集落の城木場地区の西側 域に位置する。	〔調査〕 平成8年度 〔城域〕 全長350m 〔城の実年代〕 16世紀。城跡地は、目的用 途を要えて、18世紀から幕 末まで使用されている。 〔主な遺構〕 掘立柱建物跡2棟・杭列 礎石建物跡1棟・堀切
4	御領城	大字 御領 字 馬場	〔文献〕 芳證寺の関 連記録 〔地名〕 城跡地に馬 場(うま)と堀 (ほり)とい う字名。 中心地に城 内(しほ)の 小名。	〔現地形〕 丘陵地・芳證寺・墓地 〔立地〕 海岸沿いにあり、御領漁港 に接する。 馬場川の下流域に位置する。 城跡は舌状の丘陵地にある。	_____
5	鬼池城 (宮津城)	大字 鬼池 (宮津地区) 字 城	〔参考文献〕 志岐文書 〔地名〕 城跡地に城 (しほ)とい う字名	〔現地形〕 畑地・雑木山 〔立地〕 海岸沿いにあり、東に鬼池 港、西に宮津漁港。 城跡は馬蹄形をなし、城内 に集落を取り込む。 中央部は低地で、かつて深 田であった。 北側丘陵は、国道改良工事 の際に一部が削り取られた。	〔参考〕 鬼池関連の記録は、12世紀 まで遡る。
6	梅城 (参考地)	大字 井手 字 梅城	〔地名〕 梅城とい う字名。	〔立地〕 岩質の丘陵地で、城跡らし き形状をしていない。 自然地形をそのまま使用し た可能性もある。	_____
7	小浦館 (参考地)	大字 御領 (大島地区) 字 小浦	〔地名〕 小浦荘の推 定地。	〔立地〕 北東に大島漁港。 丘陵地に五輪塔群がある。	_____

第1表 五和町所在の中世城跡一覧

には国道 324号線が走り、陸上交通の要となっているが、内陸部にも、内野川沿いに旧富岡佐
達の県道本渡・五和線や県道坂瀬川・御領線が走っている。

内陸部の中央を南側から北側に貫く内野川は二江漁港へ注いでいるが、開折谷の流域は水田
地帯となって、肩部を走る県道沿いに、城木場、上野原、寺中、中ノ井手、小峯、下内野など
の各集落が形成されている。一方、海岸地域の沿岸部には、御領漁港、大島漁港、鬼池港、宮
津漁港、引坂漁港、二江漁港の各港が並んでいる。北端部には通詞島があり、昭和50年、二江
との間に通詞大橋が完成した。西部は標高400mクラスの山が連なっている。沿岸は暖流が流
れているので、無霜地帯であるが、内陸は寒暖の差が激しい。

〔2〕 明治初期は一時期、長崎県に属していたが、その後、明治6年の八代県、白川県を経て
熊本県の管轄となった。明治22年(1889)の町村制施行により、井手と下内野の2村が合併し
て手野村に、城木場と荒河内と上野原の3村が合併して城河原村となり、これらの新村と既存
の御領村、鬼池村、二江村の3村で、計5村となった。昭和16年(1941)になって二江村は町
制を施行した。昭和30年(1955)5月1日に、これら1町4村が合併して五和町が誕生した。

〔3〕 戦前までは大島の木造船、鬼池のビワ、手野のミカン、御領の石材、城河原の竹細工な
どが知られていた。最近では、イルカウォッチングの町としても知られる様になった。

第4節 五和町の沿革

1. 原 始

昭和33年に通詞島への海底水道設置工事に際し、二江・沖ノ原の砂州で大規模な貝塚が発見
された。著名な沖の原貝塚は、こうして世に出た。発掘調査は、翌年から4次にわたって実施
され、大きな成果を得たが、縄文時代前期を上限として、弥生・古墳時代までの複合遺跡であ
ることが判明した。30数体の人骨と数万点におよぶ土器と石器が出土している。さらに一帯か
らは、古墳時代の製塩遺跡も見つかり、出土土器は、天草式製塩土器と命名された。これらの
出土品は、通詞島の町立歴史民俗資料館で、常時、展示されている。

この他、縄文時代の貝塚が御領の一尾にある。一尾貝塚は、平成7年に町史編纂室により発
掘調査が行われている。弥生時代の遺跡は、同じ御領の中尾にある。古墳は通詞島に2基の石
室墳があり、これも編纂室で調査を継続中である。

2. 中 世

建暦2年(1212)、志岐光弘が鎌倉幕府から与えられた天草六ヶ浦の一つに鬼池が見える。
16世紀後半、天草全城は、小西行長の領地となったが、慶長元年(1596)に二江で、キリスト教
信心の組ができた。元和3年(1697)には、証言書に信者代表として内野の大長島九兵衛など
が署名している。

3. 近世

天草・島原の乱では、寛永14年（1637）11月17日に、3000～4000人の一揆勢が二江で先捕えをした。明和5年（1768）の天草郡明細帳には、井手組に182人、御領組に205人のキリシタン類族の存在が記されている。

慶安元年（1648）に、曹洞宗の芳證寺（御領）・観音寺（荒河内）などへ寺領が下付された。同時代の浄土真宗の寺院としては、東禅寺・正蓮寺・西明寺（御領）、淨尊寺（大島）、光明寺（鬼池）、円教寺（下内野）などがある。その後、東明寺（井手）、明楽寺（二江）、潮音寺（鬼池）などが創建された。

神社は、御領神社、鬼池神社、引坂神社、二江神社、井手神社、上野原神社、荒河内神社、城木場神社など、多くの十五社宮がある。

御領の石本家や大島の小山家は、天草を代表する豪商である。石本家は、明和～天保年間にかけて大名貸しを行い、天保5年（1834）には、幕府の勘定所御用達を勤めた。小山家の繁栄は、明治期にまで及んだ。幕末には、長崎のグラバー邸や大浦天主堂などの工事も手掛けている。

第5節 城木場地区について

内野川の上流左岸域に開けた集落である。肥後藩から幕府に提出された『慶長国絵図』には、内野と記されている。内野は下内野・井手・上野原・荒河内・城木場の総称である。城木場地区は井手組に属し、庄屋は金子家。西手の丘陵地に本城跡がある。集落は内野川に沿って走る県道本渡・五和線沿いに展開している。この県道は富岡往還とも呼ばれ、本渡市の本戸馬場から五和町の内野を経て苓北町の富岡方面に向かっている。古くからの道路で、この道の原形が中世まで遡るのは確かであろう。この事は、内野川流域に城木場城跡を含む3城跡が分布している一因である。城木場地区は明らかに城木場城の麓集落である。

〔旧城河原村〕

明治22年から昭和30年までの村名である。城木場、荒河内、上野原の3村が合併して成立した。旧村名は、3村名の合成地名である。当初、役場は上野原に設置され、後に城木場に移転した。農業は、米作、麦作、甘藷作をはじめとして、養蚕や畜産が盛んであった。明治36～39年に、村中を通る富岡往還の工事が行われた。昭和13年からは煙草作も行われた。昭和30年の五和町誕生に際し、城木場・荒河内・上野原はそれぞれ大字名として継承された。



第3圖 城木場・荒河内・上野原周辺地形図および字図

第二章 調査の成果

〔城木場城跡の概略〕

城木場地区の字南風ノ元にある丘陵地が城跡である。丘陵の東端区域に、城の尾という城跡関連地名が残っている。

城跡については、本渡市の圓覚寺に關係記録が残っている。「城古場城」の武士であった碓久大膳太夫が、出家した旨の記載がある。

『肥後国一慶安四年江戸江差上候御帳之扣』（→57頁）と『古城考』にも「城木場古城」としての記載がある。「古」と「木」の違いはあるが、「じょうこば」の表音は同じである。報告書で使用した「城木場城」の城名は、これらの文献と地区名に寄った。

城木場地区の北東域では、西方から東下してきた荒川が内野川に合流している。さらに、同地点には、県道本渡・五和線と県道坂瀬川・御領線が交差する四つ角がある。県道の交差点はともかく、川の合流地点には城が数多く築かれており、城木場城の場合も、これに対応する。

城域は長軸約350m、短軸約175mにおよぶ大規模な丘陵地で、北北東1.4先に三川城跡が遠望される。

第1節 城木場城跡の測量調査

[1] 西側に鞍部があり、東側へ主軸が延びる広い丘陵地が城跡である。地元に、城跡としての強い認識がある。しかし、丘陵の容姿に城跡としてのインパクトは感じられず、この点において、同じ内野川流域にある下内野城跡や三川城跡とは、大きく異なっている。丘陵地東端と城河原の県道の交差点との比高差は約30mで、東下の城木場地区からすれば、小高く、広い丘陵地にすぎない。集落内から、やや入り込んだ北東側の溜池づたいに、農道を登れば、ほどなくして丘頂に出る。

[2] 丘頂域は東端部が長円形状に膨らんでおり、長軸方向は南北にある（主郭）。しかし、上面域は、全般的に削平の度合いが低く、確たる平場が形成されていない上に、地表面も一様に平らではなく、西側が高く、東側に緩傾斜の地形となっている。区域は、5ブロックに大別されるが、大方、自然地形が残った状態にある。城跡地としては、やや特異な地形である。全体の大きさは長軸90m、短軸39mである。

丘頂の北東側にあって、やや整形された区画（主郭-①）は、標高55m強で、長軸37m、短軸10-16m。見た目には、中心的な区画の様に思える。何らかの遺構の検出が期待された。こ



第4図 城木場城跡周辺地形図

の区画の南東側は、前記の様に短軸幅が極めて緩やかな傾斜地である（主郭②）。そのまま集落に下るのではなく、はっきりとした区画は形成されていないが、丘頂の東縁全体が、その様な地形になっている。これより集落側に下る東側斜面は、やや傾斜を増すが、削り落としの痕もなく、城跡特有の階段状地形もない。

対して、西側斜面には、4段の階段状地形がある。上段は、後世の段々畑のようであり、段差面も雑であるが、下段は、しっかりとした造りである。

この地形の西端中央部は、尾根筋が極端に括れた野首地形となっている。堀切の存在が考えられる所であるが、現地地形を見る限り、遺構の埋没は考えられない。しかし、この野首は、丘陵地の大きな変化点であり、城域を考える上で、極めて重要な地形である。総じて、主郭の場合、城跡地というには、人工的な地形の少ない所であるが、地元では、この野首地形を西限として、これまで述べた丘陵地の東端域（主郭）を、限定的に「^尾城の尾」と呼んでいる点が注目される。丘陵地一帯には「^南風ノ^元」という字名が残っているが、特に、野首までの区域を城の尾と限定するところが大きな鍵である。中世城跡の調査では、城の尾などの、いわゆる城跡関連地名が大きな決め手となっている。遺構と地形から城域を線引きした場合、その範囲と地名は、大体において一致する。

この様な意味から、主郭は、城跡地としての条件を有している事になる。現に、この区域から、かつて建物の礎石と思われる石が、農耕時に掘り出されている。丘頂域に石の散布をみないところから、明らかに、他の地域からの持ち込みである。2個分については、岩崎良弘氏宅の漬物石として現存している。さらに、調査時に斜面部から1個が確認された。

この区域では、調査前から礎石建物の存在が推測される状況下にあった。しかし、丘陵地の複雑な地形からして、城の範囲はさらに西側と北側に拡大する事が確実である。

[3] 野首は、中央部分が瘦せ馬の背のようになっており、ここに1m幅の狭い農道が通っている。両脇は、段下がりに階段状地形が農道に併走している。野首全体の上面幅は18m。農道を西側へ約90m進むと墓所にする。主なものとしては城木場地区の歴代の役座（金子家）の墓が並んでいるが、この区画は、尾根筋の一面を削平したもので、地形の変化点（A区）である。標高59.5m弱で、長方形をしており、長軸16m、短軸7.5m。主軸の向きは、東西方向にある。

ここから農道は二股に分れ、一つは北側の緩斜面を下り、他方は丘頂ラインをさらに西側へ延びていく。北側斜面では谷部を挟んで、東西両軸に階段状地形が重なっている。裾部には、近世の溜池跡がある。一方、西側へ延びる農道の南側一帯は、11～18m幅の緩傾斜地で、それより下位は、急斜面に変化している。

[4] A区から西側へ約40m進むと、2つ目の墓所にする。この区画も、丘頂ラインを削平した地形の変化点(B区)である。東側から見れば、小高いところで、平場は長円形をしており、長軸20m、短軸11m。主軸の向きは南北方向にある。ここで農道は途切れている。地形的には、この区画を軸として、北側に張り出す帯状の尾根筋と、さらに、西側へ延びる尾根筋に分かれる。北側の張り出し部分の斜面では、7段の階段状地形が重なっている。

B区から西側へ22m進むと、3度目の地形の変化点(C区)となるが、その間の北側斜面部の中央には、谷が下っている。B区から張り出す尾根筋は、この谷部の東軸に他ならない。西軸にあたる段下りの尾根筋は、緩やかに谷部へ下っていく。谷部の地形も段々になっており、裾部に相撲場跡の窪地がある。

[5] C区は長方形をしており、長軸22m、短軸9m。主軸の向きは東西方向にある。この区画の西下には、大きな迫地があるので、主郭から続いてきた丘頂域は一旦、ここで途切れる事になる。なお、C区の南東側には、派生尾根が延びているが、上面域は削平されて城跡に見合う地形(D区)をしている。但し、鞍部箇所には堀切はない。上面域はやや弯曲しており、長軸37m、短軸14m。東西両端には、階段状地形がある。

[6] C区西下の迫地(E区)は、自然地形を利用した堀切とも言うべきものである。C区から比高差にして8.1m下にある8m幅の丘頂ラインから北西側に谷が下っている。谷底は7段に分かれており、丘頂ラインと最下部との比高差は12.8m。南東側にも谷が下っており(F区)、底部は大きく2区画に分かれている。

[7] 迫地E区の西側に、はっきりした人工的な区画(G区)がある。前方後円墳のような地形をしており、上面域は2区画に区分される。上段面は角丸の長方形で、標高58.6m、長軸23m、短軸17m、主軸の向きは東西方向にある。下段面は、細長の舌状形をしており、主軸の向きは北側にある。上段面との比高差は2.42m、長軸30m、短軸は南側19m、北側10m。四方に帯状の階段状地形が巡っている。東側1段、西側2段、北側3段、南側1段で、各段差面には削り落としの痕跡がある。

[8] G区の南西隅に、南側と西側の階段状地形を吸収して、南側へ延びる長さ47mの派生尾根(H区)がある。上面は平らで、2区画に分かれている。北側が長軸27m、短軸12.5m。一段下がった南側が長軸20.5m、短軸7m。

[9] G区とH区の西下に自然地形を利用した2つ目の堀切(I区)があり、「上の迫」と呼ば

れている。加工の度合いは、E区の堀切よりもはるかに大きい。I区側の東壁面は高さ5.63mにおよぶが、非常にはっきりとした削り落としの痕跡が残っている。原形となった迫地は大規模で、丘頂ラインを完全に遮断している。底部は、南北の長さ140m、東西幅約15mで、大きく5ブロックに分かれている。広い意味では、E区とI区で、二重堀が形成されている。

南部では、東方向へL字形に折れ曲がっているが、変化点から50mのところにはF区の小谷が合流している。結果として、これらの小谷は、H区を三方から包み込む事にもなる。さらに、南西端部には、西側へ延びる派生の迫地（I区-①）があり、これも堀の役目を果たしていたものと思われる。長さ28m、幅6m、西端部は1.3mほど高くなっている。

〔10〕主郭の北側にも、丘頂ラインが下っている。ここには、長さ15m、幅21mの堀切（J区）と、その対岸に尾根筋を加工した小高台の区画（K区）があり、いづれも墓地となっている。

J区は、丘頂ラインを断ち切る格好をしているが、元来は迫地を加工したものであろう。東端下には、この堀切に繋がる迫地が北東側へ延びており、端部は溜池となっている。この溜池の南側肩部には、本文の冒頭で述べた主郭へ至る農道が登っている。

K区の上領域は、形のやや崩れた長円形で、東西方向に主軸の向きがあり、長軸19m、短軸10m。周囲には、階段状地形が巡っている。北側では4段が重なり、残る三方は1段である。

〔小 結〕

① I区の堀切が城木場城跡の西限で、城の本体と目されるのは、集落側の丘頂（主郭）である。これに対して、西側の奥まったG区は、詰めの城的な区画と推定される。この縄張り、平成7年度に調査を実施した三川城跡のものと同じである。広い丘陵地を縄張りに取り込みながら、先端部に城の中心地を置き、奥まった鞍部に詰めの城的な区画と、自然地形を利用した大規模堀切を配置するパターンである。城跡の構造から三川城跡との関連がうかがわれて興味深い。

② 城木場城跡の場合、丘陵地は南側が急傾斜地で、北側は緩傾斜地という対称的な地形になっている。したがって、南向きで、本渡方面を意識した城という事になる。江戸時代の井手組の庄屋であった金子家の敷地が、城跡の北東麓に残っているのも、城の向きと関係があるのかも知れない。麓集落の中心区域は城の北側に形成されていたと思われるからである。

③ 集落内のセンター的な中世城跡では、単に軍事学的な戦闘城だけでは、理解できない面がある。非常時において、地域（麓集落）住民を城内に取り込んで保護する事も主たる目的の一つであったと考える。事実、山鹿市やまかの城村城じょうむらでは、天正15年（1587）の肥後の国衆一揆の際に多くの住民が城内へ逃げ込んでいる（註1）。『フロイス日本史』には、天正17年（1589）の天草合戦でも、村落のキリシタンが城に立て籠ったという記載がある（註1）。近年の研究では、当時、

戦闘の際に、住民の誘拐が多発していたという見解が出されている。その様に考えれば、城木場城跡の広大な城域も納得できる。

④ 今回、城跡と考えられる丘陵地の全域を詳細に測量調査した。中世城跡では、遺構が数多く残り、一見して城跡とわかる場合と、自然地形が卓越して、そうでない時がある。城木場城跡は、後者の部類であるが、この様に難しい方の城跡地を全域調査できた事は大きな喜びである。この類の城跡地を調べあげた事例は稀で、貴重な資料である。

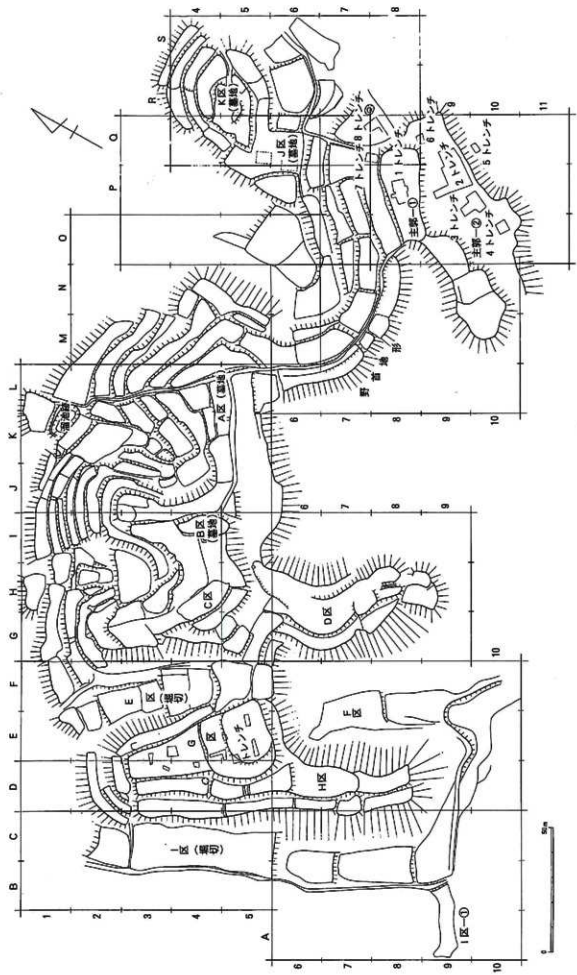
(注1)

天正12年(1584)の『上井覚兼日記』によると、島津氏に攻められた時、有働氏(隈部氏の重臣)の城村城(山鹿城・清滝城)では、郡内三里四方の百姓が難を避けて城内に避難しているとある。さらに『拾集物語』では、鉄砲八三〇挺用意し、男女一万八千余人が籠城したと伝える。城の広さについては、『慶安四年の差出』に「曲輪千間」、『肥後国誌』に二町八反九畝九歩とある。

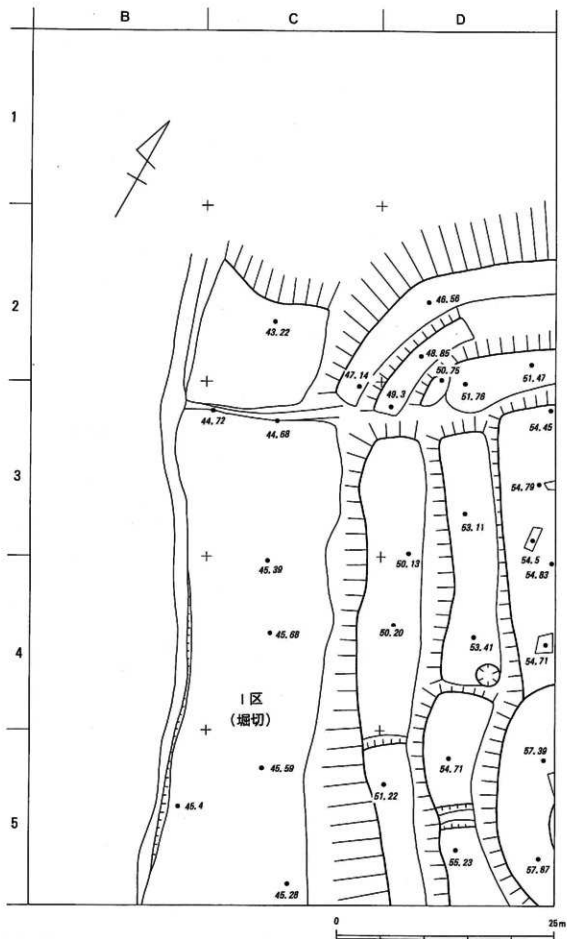
(注2)

『フロイス日本史』12巻22頁「天正17年 天草合戦 本渡戦の部」

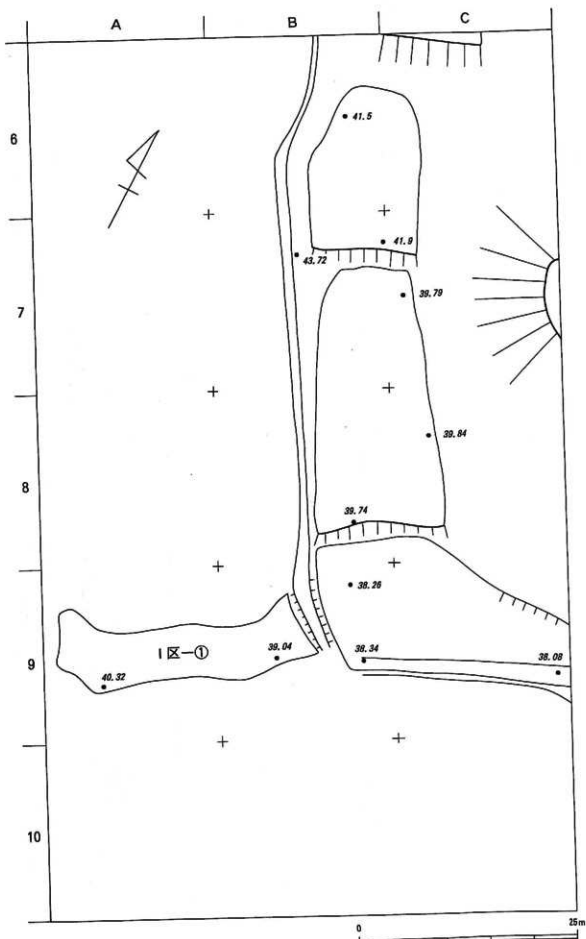
(小西、加藤の)軍勢は、ただちに海陸から天草領に進入し、本渡の城を包囲した。——(略)——
(本渡)城はドン・ジョアン(天草久種)の居城に次いで(天草)領では最も堅固であり——(略)——
本渡(城の支配)に属している多数の村落に住んでいるキリシタン全員が妻子や家人とともに同城に立て籠った。というのは、戦いに於いては何一つ看過されることもなく、一切のものが焼却、破壊されて火と刃(の犠牲となる)ので、集落や村の人々は全員が籠城する以外に(生き延びる)方法としてはなかったからである。(しかし)そのために彼らは(城内では)長期にわたって生活することができず、生命を失うことになるのである。



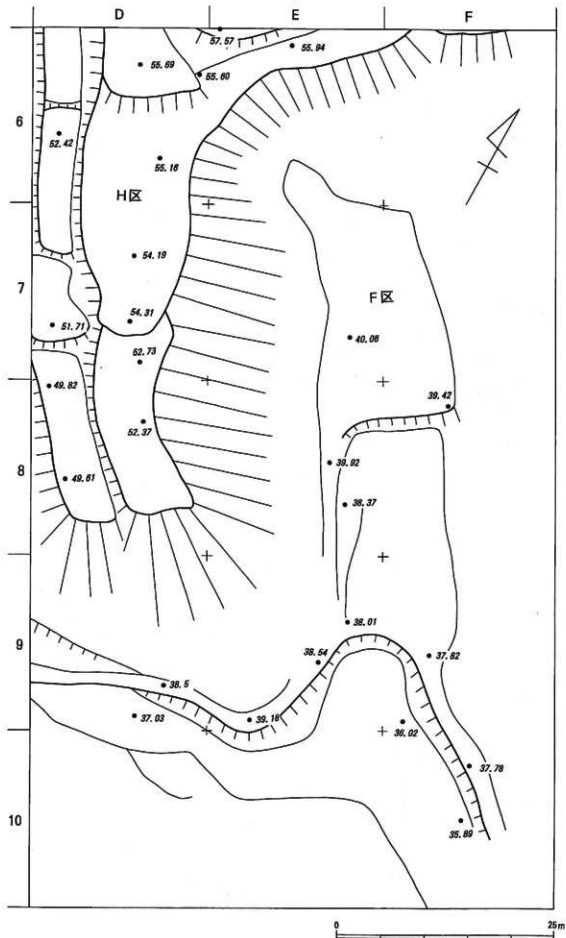
第6図 城址遺跡グリッド設定図



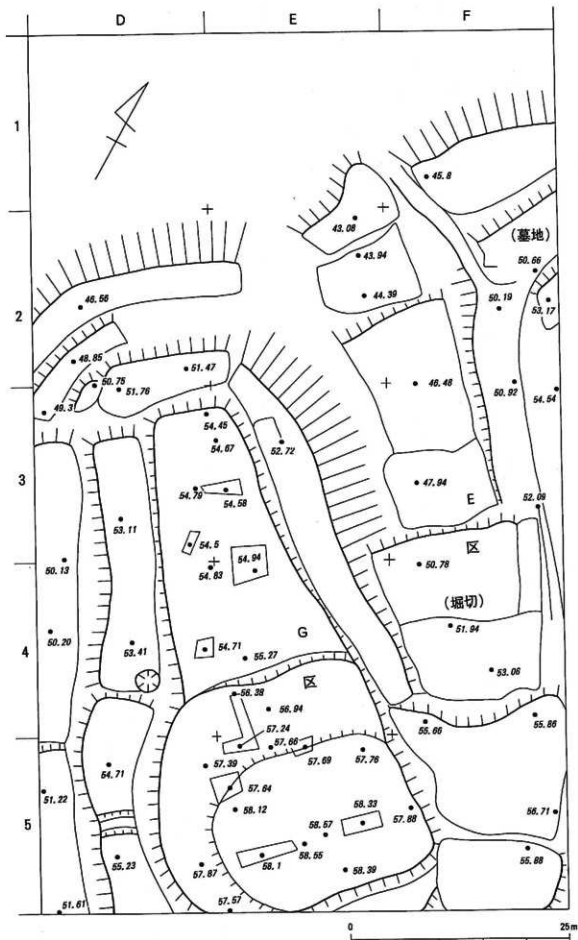
第7図 城木場城跡測量図①



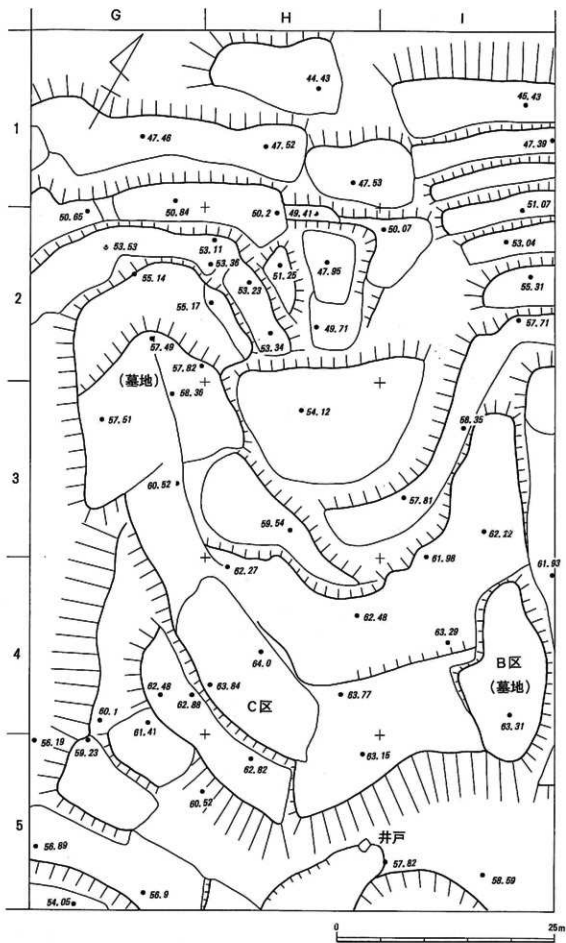
第 8 図 城木場城跡測量図①



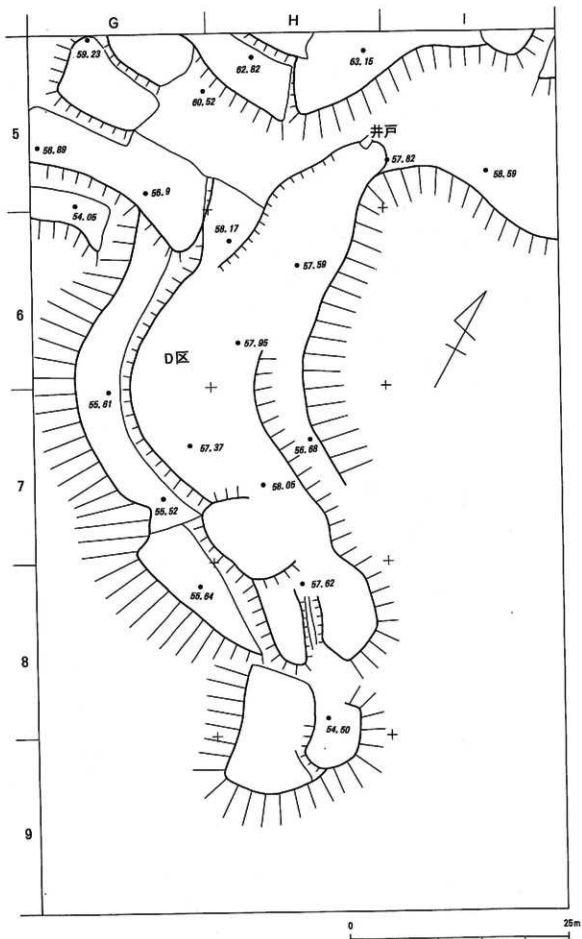
第9図 城木場城跡測量図③



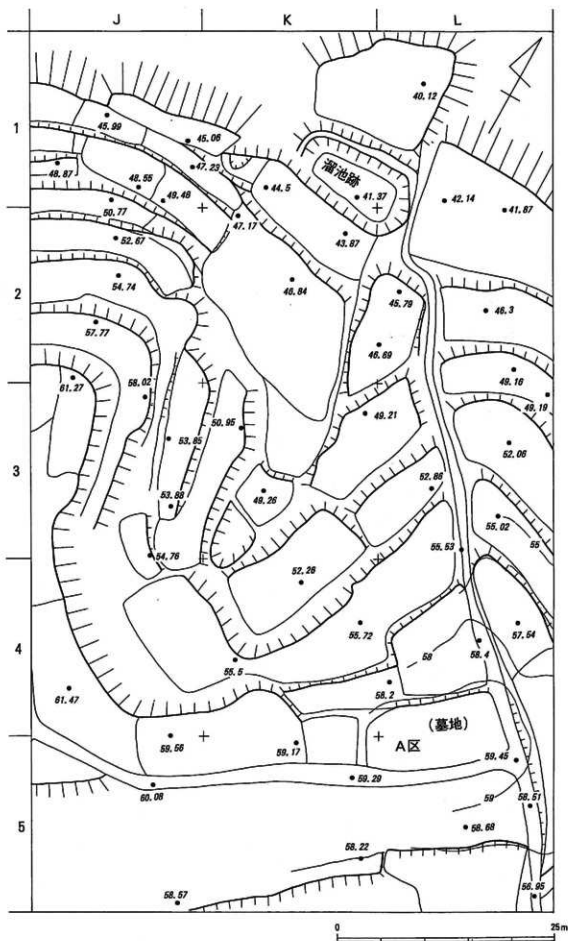
第10図 城木場城跡測量図④



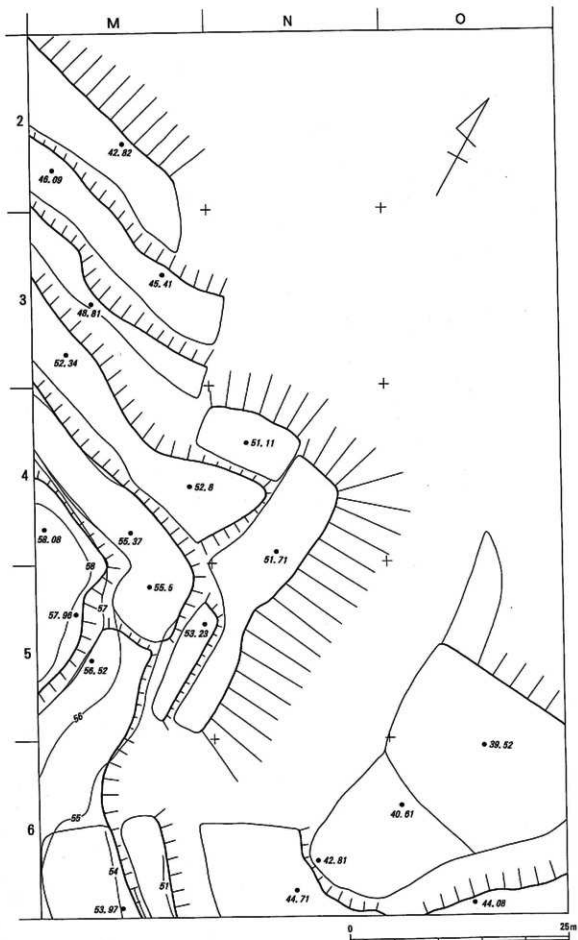
第11图 城木場城跡測量图⑤



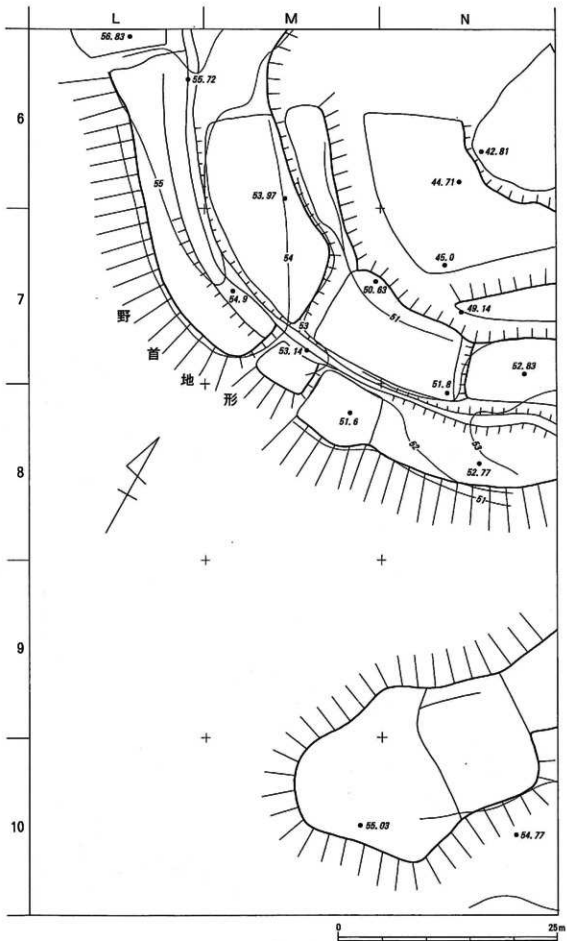
第12図 城木場城跡測量図⑥



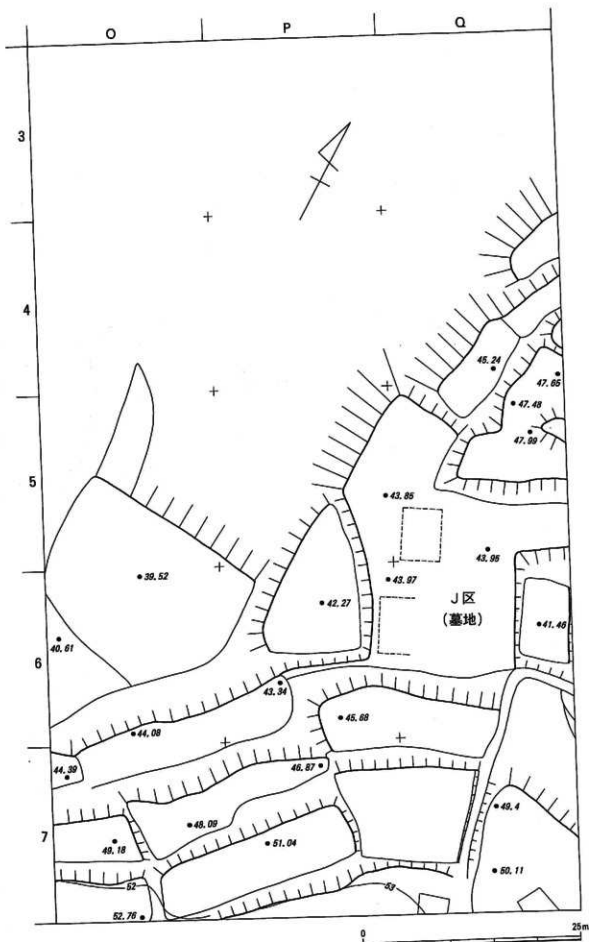
第13図 城木場城跡測量図⑦



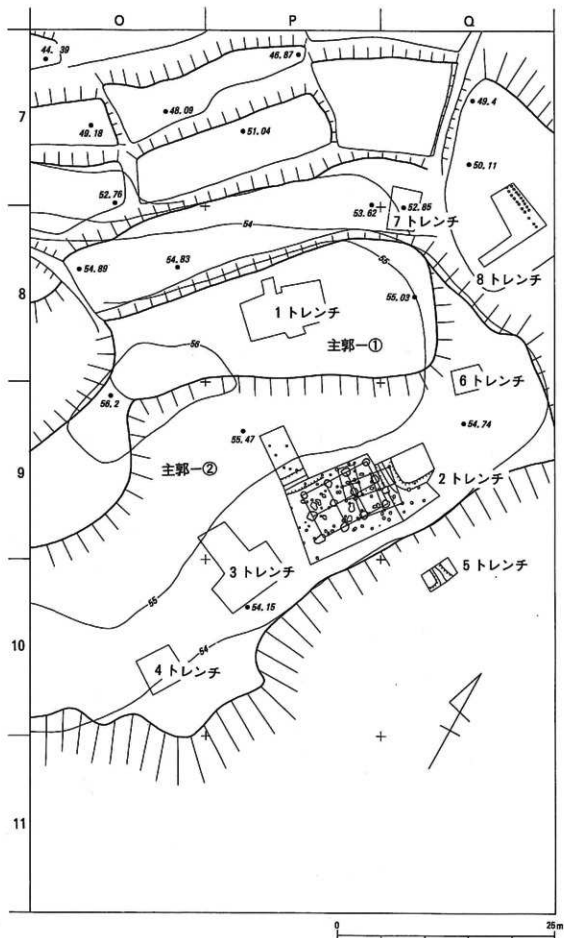
第14図 城木場城跡測量図⑧



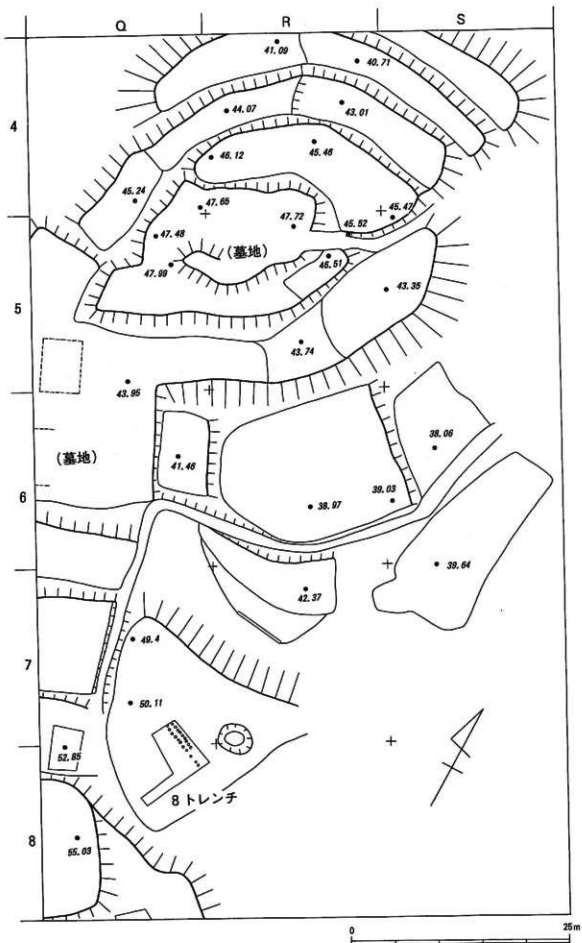
第15図 城木場城跡測量図⑨



第16图 城木場城跡測量图⑩



第17図 城木場城跡測量図①



第18図 城木場城跡測量図②

第2節 城木場城跡の発掘調査

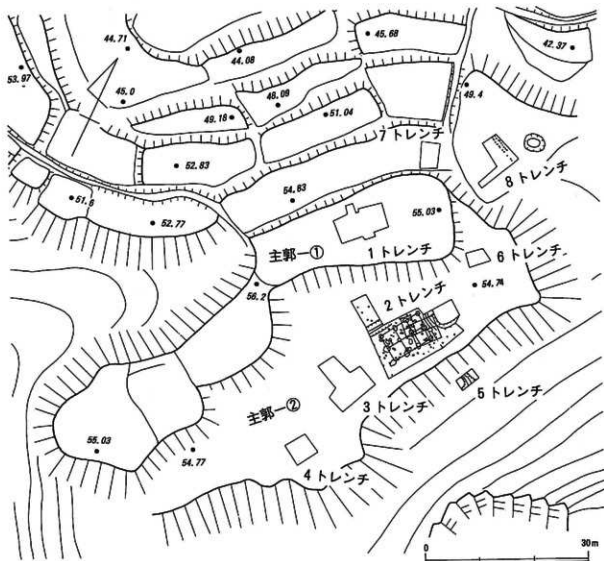
1. 主郭

城の尾と呼ばれる区域である。建物の礎石と思われる岩崎良弘氏宅の漬物石は、ここから掘り出されている。かつては畑地であったが、今は竹草の繁茂する所で、伐採作業から調査に入った。ここでは合計8ヶ所にトレンチを入れた。

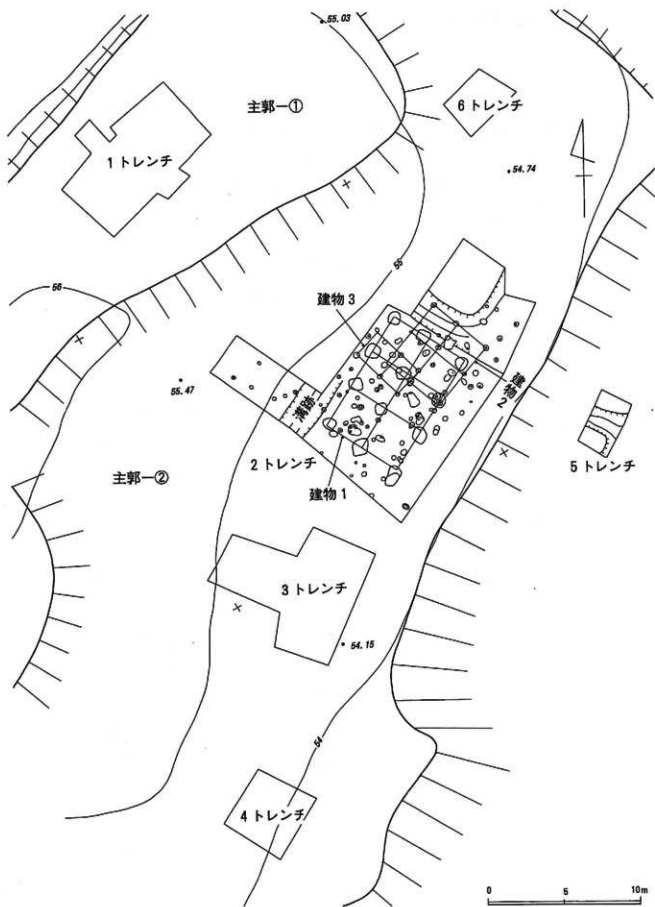
表土は浅く、平均して20cm前後でローム層土が露出した。建物跡の礎石とその抜き取り穴の検出を期待したが、礎石に見合う石は検出できなかった。

[1トレンチ]

主郭①に設定したトレンチである。丘頂ラインに沿って長さ9.5m、幅5mの範囲を調査したが、遺構は存在しなかったし、遺物も出土しなかった。地形的には主郭の中心地と見なされる所で、意外な調査結果であった。



第19図 主郭周辺測量図①



第20図 主郭トレンチ設定図

[2 トレンチ]

主郭②に設定したトレンチである。漬物石が掘り出されたのは、この地点である。主郭は、東側が全体的に緩斜面となっているが、このあたりは不完全ながら、南北に細長い平地が確保されている。ただし、完全なものではなく、はっきりした区画も形成されていない。

丘頂ラインに沿って、東側で17.5m、西側で10m、幅9mの区画を調査したが、途中、北縁で長さ5m、南西隅で西側へ長さ7m、幅3mの拡張区を設けた。しかし、予想された原位置を留める礎石は1個も無かった。そこで礎石の抜き取り穴の検出に努めたが、それらしきものは無く、調査は困難を極めた。わずかに東側斜面から一個の礎石を発見したに止まった。ところが、雨上がりに、地山の上面にわずかな土色の変化箇所があることに気付いた。慎重に調査を進めたところ、極めて浅い掘り込み穴が12個並んでいることがわかったのである(建物1)。この様な事は、ローム層土を切り込む遺構にありがちな現象である。

結果として、これらが礎石の抜き取り穴という事が判明した。これらは個々に礎石の周りから広く掘り窪められていた。検出状況から、後世に地山の層上土は、かなり大幅に削除されていることがわかる。そのため、辛うじて、極くわずかな抜き取り穴の底部が残っていたのである。この外に、建物1に先行する掘立柱建物跡(建物2・3)の柱穴が検出された。

しかし、相変わらず城時代に見合う出土遺物は少なく、検出遺構の年代推定に頭を悩ます事になった。

建物1 地山の褐色ローム層土に変色部分があり、これを線引きしたところ、梁行2間×桁行3間の礎石建物跡が復元できた。変色部分は、やや灰色味を帯びており、雨上がりにその範囲が確定できた。

建物1の規模は、梁行5.4m、桁行8.4mで、桁行の方位はN30° E。柱間は梁行で均等割りの2.7m、桁行で北側から南側へ2.7m+2.7m+3.0m。

(単位: cm)

礎石抜き取り穴番号	長径	短径	備 考
1	86	82	西縁は凸形になっている。
2	72~86	84	南北両縁がしゃげている。小柱穴が南縁を切っている。
3	84	60~80	北縁の形状は、隅丸方形に近い。
4	92	76~88	3個の柱穴が検出された。
5	100	60~86	柱穴が検出された。
6	70~98	96	形状は、隅丸方形に近い。
7	96	80~94	南縁の両隅は、方形に近い。
8	78	76	形状は方形。
9	90	60~82	形状はやや歪。
10	84	—	南側に礎石を掘り出した後、さらに移動させるための穴が掘られている。
11	106	98	形状は方形に近い。
12	80	70	西縁の形状は隅丸方形に近い。

第2表 建物1 礎石抜き取り穴計測表

建物 2 梁行 2 間×桁行 2 間の掘立柱建物跡である。規模は、梁行4.4m、桁行4.9mで、桁行の方位はN37° E。柱間は、梁行で北側から南側へ2.4m+2.0m、桁行で東側から西側へ2.3m+2.6m。

建物の中央部寄りに位置するP15は、柱筋より東側へ18cmずれているため、側柱のみの構造であった可能性もある。柱跡は、地山の上層土がカットされている事を考慮にいれても、全体的に小振りで、小屋掛け程度の建物であったと思われる。柱穴の埋土色は灰褐色で、柱痕色は褐灰色。

(単位: cm)

柱穴番号	短径	長径	備 考
13	38	34	柱痕の大きさは14cm。
14	32	30	
15	36	28	柱穴の形状は、やや歪。柱痕の大きさは20~24。
16	26	26	柱痕の大きさは14cm。
17	32	32	柱痕の大きさは16cm。
18	—	—	直径16の柱痕のみを検出。
19	36	36	柱痕の大きさは16cm。
20	56	38	柱痕に該当する部分の大きさは30cm。柱抜き取り穴の可能性もある。
21	46	36	

第 3 表 建物 2 柱穴計測表

建物 3 建物 2 との先後関係は、はっきりしないが、規模と重なり具合から、建物 2 より後のものと思われる。梁行 1 間×桁行 2 間の極めて小規模の掘立柱建物跡である。

梁行2.0m、桁行3.7mで、桁行の方位は、N46° W。

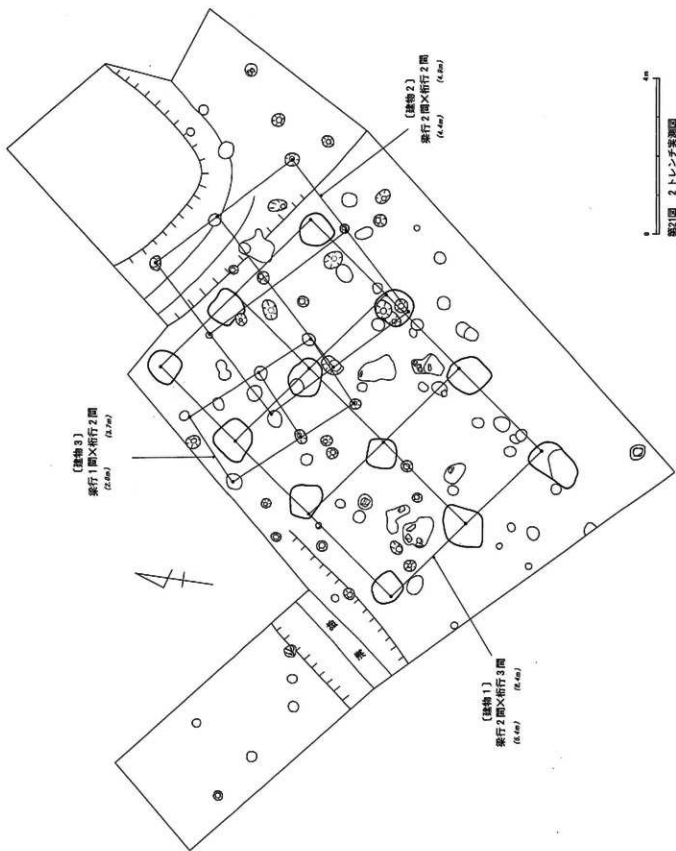
柱間は桁行で南側から北側へ1.6m+2.1m。側柱のみの構造である。物置小屋のような建物であったと思われる。柱穴の埋土色は、建物 2 と大差ない。

(単位: cm)

柱穴番号	長径	短径	備 考
22	36	30	
23	36	32	
24	26	22	
25	28	26	柱痕の大きさは12cm。
26	38	28	柱痕の大きさは12cm。
27	40	40	

第 4 表 建物 3 柱穴計測表

溝 跡 2 トレンチの南西隅から、建物 1 の西側桁行に沿って溝跡が検出された。溝跡は、北側から南側に傾斜しており、そのために掘り込みは南側に深く、北側に浅い造りになっていた。したがって、検出できたのは、トレンチの南側から北側へ長さ4.5m分のみである。南端部での溝幅は2m、底部幅は0.5m。建物 1 に関連した仕切り溝の一部と思われる。



第21図 2 トレンチ薬源図

〔3トレンチ〕

2トレンチから南側へ3.0~4.5m離れた所に設定したトレンチである。丘頂ラインに沿って、長さ8m、幅3.5~4.5mの範囲を調査したが、2トレンチに続く建物遺構は検出されなかった。途中で西側の斜面部に長さ5m、幅3.5mの拡張区を設けた。

〔4トレンチ〕

3トレンチから南側へ8m離れたトレンチである。4.5m四方を調査したが、ここからも遺構は検出されなかった。

〔5トレンチ〕

2トレンチから東側へ6m下った斜面部に設定したトレンチである。丘頂ラインに沿って、長さ3.8m、幅2.2mの範囲を調査したが、侵食によると見られる溝状の窪地が検出された。

〔6トレンチ〕

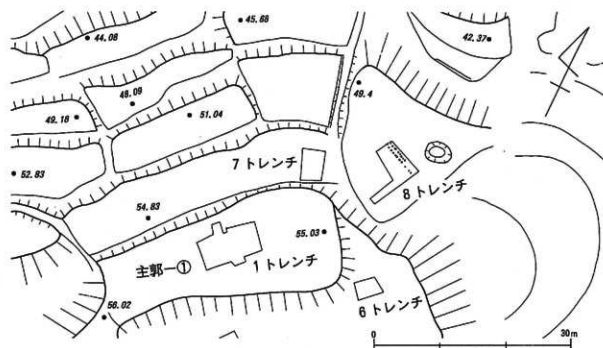
2トレンチから北東側へ離れた所に設定したトレンチである。丘頂ラインに沿って長さ3.5~4.0m、幅2.8mを調査したが、2トレンチに続く建物遺構は検出されなかった。

〔7トレンチ〕

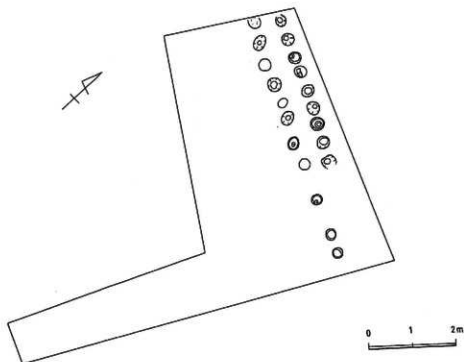
主郭から北側へ1.41m下がった平場に設定したトレンチである。長さ4.8m、幅3.5mを調査したが、遺構の検出はなかった。

〔8トレンチ〕

主郭の北端から比高差にして4.9m下った所に、斜面部を削平した三角形の平場がある。南北の長さ22m、東西幅21mで、この区画にトレンチを設定した。東西の長さ6m、南北幅3~4mを調査したが、途中で南側へ長さ5m、幅1mの拡張区を設けた。



第22図 主郭周辺測量図②



第23図 8トレンチ実測図

杭列跡 2列の杭痕が検出された。これらは、明らかにセット関係をなすもので、0.7m幅の間隔を保ち、N56°W方向に並んでいる。検出部分の長さは、南側で5.8m、北側で3.7m。杭痕数は南側で11個、北側で9個を数える。杭間の長さは不定で、その数は長さ3.7mの範囲で、北側に8個、南側で9個が並んでいる。杭痕の大きさは、直径約30cmを測る。これは、虎口に関連した遺構であると思われる。

2. G 区

城域の西限近くの区画で、東西両側は自然地形を利用した堀切(E区・I区)で囲まれている。詰めの城的な区画で、何らかの遺構の存在が予想された。しかし、9か所トレンチを入れて調査を行ったにもかかわらず、遺構は検出されなかった。さらに、城時代に見合う遺物も出土しなかった。

【小 結】

岩崎立志氏によれば、今日、大方、荒地地となっているが、城跡の丘陵地は昭和30年代まで、主に、甘藷の栽培地で、桑畑も目立ったという。重機を入れて造成した事もなく、さしたる地形の変更はなされていないとの事である。したがって、後世の農耕作業で、ローム層土の上層部分がある程度カットされた事があるにしても、もともと城時代の遺構は少なかった事が考えられる。

なお、調査では表土に混じって、縄文時代の黒曜石の剥片が出土しているが、これに、見合う遺構は検出されなかった。

第三章 出土遺物

調査区は、雑草の繁茂する荒地であった。地元の言によれば、昭和30年代までは、広く畑地として利用されていた所である。雑草を刈り取った後で、表土を剥ぐと、すぐに地山のローム土が露呈した。表土から少量の遺物が出土したが、少量で、いずれも細片であった。産地は、大方、肥前系であったが、中に、天草産のものが混じっている。

1. 青磁

1は釉色が灰オリーブ色の火入か香炉で、17世紀後半から18世紀前半のものである。

2. 白磁

2～6は、18世紀のものである。2が小杯、6が小碗、3が杯、4・5が碗である。この中で4は、天草産と思われる。

7～15は、19世紀のもので、10は、1820～60年代に限定できる。11～15は、幕末まで時代幅が広がる。7・10・14・15は碗、8・9・11・12は皿、13は瓶である。

3. 染付

16・17は碗で、16世紀のものである。この2片のみが、城木場城時代の遺物である。中国産で、景德鎮窯で焼かれている。17は、前半から中葉に限定される。

18～36は、18世紀のもので、21・22は前半から中葉、23～24は中葉から末、25～36は後半に限定される。大半は碗で、他に、筒型碗の27、碗蓋の28、皿の22～24・33～36がある。20に網目文様、21・29・30の内底面にコンニャク印判文様(29・30は五弁花文様)、27・28に雪輪文様(28は蓮弁文様)、31に竹文様、32に丸文様、35・36に円文様、21・31・33・34に格子文様がある。調整面では、23・24の外底面に蛇ノ目割りがなされている。

38～45は、1780～1810年代に限定できる。いずれも碗であるが、38～42は筒型を呈する。38に雪持ち笹文様、40に七宝繋ぎ文様、42に格子文様、43に輪房文様、45に矢羽根文様がある。

37・46～50は、上限が18世紀の後半と末で、下限を幕末とする。37が瓶、46・48・49が碗、47が壺、50が皿である。47に菊文様、48に円文様、50に源氏香文様がある。

51～56・59～66・69は、1820～60年代に限定できる。総て、碗である。51に植物文様、52に鶴(?)文様、52・53・62に雷文帯文様、54に唐草文様、55に唐子文様、56・61に蓮弁文様、59・60に格子文様、61に雲芝文様、62に円状文様、63に葉状文様、66に四方棒文様、69に点描き文様がある。

57・58は、上限が19世紀末で、下限を幕末とする。57に若松(?)文様、58に斜格子文様がある。

67・68・70～81は、上限が19世紀初頭で、下限を幕末とする。75～79は皿、80・81は鉢、他は碗である。68・70・75に植物文様、72に蛸唐草文様、73・74に格子文様、79・80に雷文帯文様がある。80には、口唇部に連円文様、外器面に弧状文様がある。77・78には、器面一杯に呉

須が塗られている。

4. 陶器

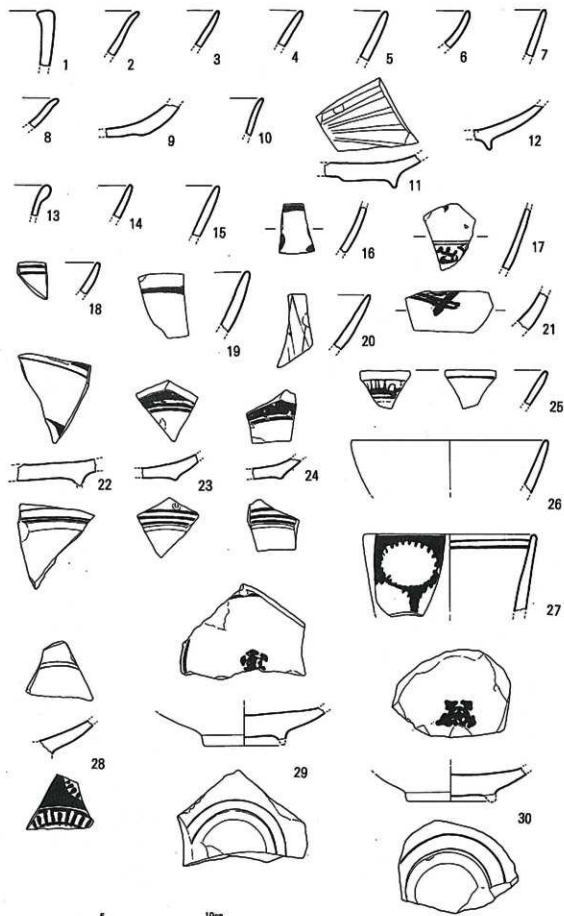
82・83は、上限が17世紀後半で、下限を18世紀とする碗である。84～86は、18世紀のもので、84・85が鉢、86が壺臺である。産地は、九州内と思われるが、特定できない。

87～105は、上限が18世紀で、下限を19世紀とする。この中で、97～98は、18世紀後半から、19世紀前半に限定できる。87～97は、天草産と推定される。

82・83・87・98～101が碗、84・85が鉢、86・91～93が壺の類、88～90・102～104が摺鉢、94・97が瓶、95が把手、96が袋物、105が土瓶である。87・94～96には鉄釉がかかる。99・100は白化粧が施されている。100に二彩手文様がある。

番号	器種	器厚	形態の特徴	文様・手法・調整	備考
1	青磁 (双押) 肥前系 17C後半 ～ 18C前半	体部下位 4.5mm 口縁部 8.0mm	〔口唇〕 丸みを帯びて、 やや凸。 〔体部〕 内器面は内弯。 外器面は直線的 伸びるが、若干、 丸みを帯びる。	〔内外器面〕 無文。	〔釉色〕 灰オリーブ色。 〔胎土〕 白灰色。 〔内器面〕 下部で、釉がかりに むらがある。 〔出土地点〕 主郭。
2	白磁 (小杯) 肥前系 18C?	体部下位 3.0mm 上位 3.0mm 口縁部 1.0mm	〔口縁〕 直口。 〔体部〕 直線的に伸び て上位で外弯。	〔外器面〕 口縁から6mm 下に極薄のロ ク口痕。	〔釉色〕 白色。 〔焼成〕 焼切っている。 〔出土地点〕 主郭。
3	白磁 (杯) 肥前系 18C?	体部下位 4.0mm 上位 3.0mm 口縁部 2.0mm	〔口縁〕 直口。 〔体部〕 基本的に直線 的に伸びる。 内器面は、僅か に内弯。外器面 は、半月状を呈 する。	—————	〔釉色〕 白灰色。 〔出土地点〕 主郭。
4	白磁 (碗?) 九州産? 18C?	体部下位 4.0mm 上位 3.5mm 口縁部 3.0mm	〔体部〕 やや外弯。	〔外器面〕 口縁から11mm 下に縦刻線内 (1.5mm幅)が1 mm間隔に並ぶ。	〔釉色〕 白(褐)色。 〔外器面〕 貫入あり。 〔出土地点〕 主郭。
5	白磁? (碗?) 肥前系 18C?	体部下位 4.5mm 上位 3.5mm	〔体部〕 やや内弯。	—————	〔釉色〕 鈍い白色。 〔焼成〕 焼切っている。 〔外器面〕 貫入あり。 〔出土地点〕 主郭。
6	白磁 (小碗) 肥前系 18C後半?	体部下位 4.0mm 上位 3.0mm	〔体部〕 内器面は、わ ずかに内弯。外 器面は、半月状 を呈する。	—————	〔釉色〕 濃白色。 〔焼成〕 焼切っている。 〔出土地点〕 主郭。
7	白磁 (碗?) 肥前系 19C	体部下位 3.5mm 上位 3.0mm	〔体部〕 直線的に伸び る	—————	〔釉色〕 白(褐)色。 〔内外器面〕 貫入あり。 〔出土地点〕 G区。
8	白磁? (皿?) 肥前系 19C?	体部下位 3.0mm 上位 4.0mm 口縁部 2.5mm	〔体部〕 内弯気味に伸 び上位で外弯。	〔内外器面〕 薄いロク 口痕。	〔釉色〕 鈍い白色。 〔焼成〕 焼切っている。 〔出土地点〕 G区。

第5表 出土遺物観察表①



第24图 出土遺物実測图①

番号	器種	器厚	形態の特徴	文様・手法・調整	備考
9	白磁? (皿?) 肥前系 19C?	底部 3.0mm 外底端 8.0mm 体部下位 6.5mm	〔底部〕 平底。 〔体部〕 内弯気味に立ち上がる。	〔外器面〕 下位に細かいロク口痕。	〔釉色〕 薄白色。 外器面は薄白色。 内器面は濃白色。 〔胎土〕 下位は無釉。 〔出土地点〕 主郭。
10	白磁? (碗) 肥前系 1820年~ 1860年頃	体部下位 2.5mm 上位 2.5mm 口縁部 1.5mm	〔口縁〕 直口気味。 〔体部〕 外器面は、直線的に伸びる。 内器面は、最上位で外弯。	—	〔釉色〕 白色。 〔出土地点〕 G区。
11	白磁 (皿) 肥前系 19C初~ 幕末	底部 9.0mm	〔体部〕 底部と比較して薄壁。 〔外底〕 中央部は凹形。 〔高台高〕 4.0mm	〔内器面〕 輪下に菊花形文様の稜線。 〔外底面〕 中央部を除き周囲は、蛇ノ目割ぎ。	〔釉色〕 白(青)色。 〔出土地点〕 主郭。
12	白磁? (皿) 肥前系 肥前系 肥前系	体部下位 7.0mm 上位 3.0mm	〔高台高〕 7.0mm	〔内器面〕 見込みに蛇ノ目割ぎ。	〔釉色〕 濃白色。 〔胎土〕 焼切っている。 〔出土地点〕 主郭。
13	白磁? (瓶) 肥前系 19C初~ 幕末	頸部 4.5mm(狀) 体部 3.0mm	〔頸部〕 内器面は、やや内弯。外器面は丸みを帯びる。 〔体部〕 薄壁。	—	〔釉色〕 白灰色。 〔出土地点〕 G区。
14	白磁? (碗) 肥前系 19C~幕末	体部下位 3.0mm 上位 3.0mm 口縁部 2.0mm	〔体部〕 外器面は直線的に伸びる。 内器面は、半月状を呈する。	—	〔釉色〕 鈍い白色。 〔出土地点〕 主郭。
15	白磁? (碗?) 肥前系 19C~幕末	体部下位 4.0mm 上位 3.0mm 口縁部 2.5mm	〔体部〕 外器面は、半月状を呈する。 内器面は、直線的に伸びる。	—	〔釉色〕 鈍い白色。 〔内外器面〕 貫入。 〔出土地点〕 G区。
16	染付 (碗) 中国(漢朝) 16C	体部下位 4.0mm 中位 3.0mm	〔体部〕 内弯。	〔外器面〕 文様。	〔釉色〕 白色。 〔胎土〕 薄青色。 〔出土地点〕 主郭。
17	染付 (碗) 中国(漢朝) 肥前系	体部下位 3.0mm 中位 3.0mm	〔体部〕 内弯。	〔外器面〕 2条の文様。 〔内器面〕 文様痕。	〔釉色〕 灰白色。 〔胎土〕 青黒色。 〔出土地点〕 主郭。
18	染付 (碗?) 18C?	体部下位 4.0mm 上位 3.5mm 口縁部 3.0mm	〔体部〕 やや内弯。	〔内器面〕 上位に2条の界線(1.0mm幅)	〔釉色〕 灰白色。 〔胎土〕 黒青色。 〔出土地点〕 主郭。
19	染付 (碗) 肥前系 18C	体部下位 5.0mm 上位 4.0mm 口縁部 3.0mm	〔体部〕 やや内弯。	〔外器面〕 上位に肉太の横線(2~4mm幅)	〔釉色〕 灰白色。 〔胎土〕 薄黒青色。 〔出土地点〕 主郭。
20	染付 (碗) 肥前系 18C	体部下位 5.0mm 上位 3.0mm 口縁部 2.0mm	〔体部〕 やや内弯。	〔外器面〕 網目模様。	〔釉色〕 くすんだ灰色。 〔胎土〕 薄黒青色。 〔出土地点〕 主郭。
21	染付 (碗) 肥前系 18C前半 ~中葉	体部下位 5.0mm 上位 3.0mm 口縁部 2.0mm	〔体部〕 やや内弯。	〔内底面〕 コンニャク印判を有する。 〔外器面〕 2重の直線を描かれた格子文様。 〔内器面〕 2条の界線、上位に横線痕。	〔釉色〕 白灰色。 〔胎土〕 薄黒青色。 〔出土地点〕 主郭。
22	染付 (皿) 肥前系 18C前半 ~中葉	底部 7.0mm 外底端 8.0mm 体部 6.0mm	—	〔外器面〕 下位に界線。高台の外縁に界線。 〔内底面〕 2条の界線中央部奇りに、文様痕。	〔釉色〕 鈍い白色。 〔胎土〕 薄黒青色。 〔出土地点〕 主郭。

第6表 出土遺物観察表②

番号	器種	器厚	形態の特徴	文様・手法・調整	備考
23	染付(皿) 肥前系 18C中葉 ～末	底部 5.0mm 体部 4.0mm 高台 2.0mm	〔外底〕 中央部は、凹 形(欠損) 〔高台〕 微高。	〔外器面〕 立上り部分 から高台の 外縁にかけて、 3条の界線。 〔内器面〕 3条の界線 と文様痕。 〔外底面〕 蛇ノ目割ぎ。	〔釉色〕 鈍い白色。 〔呉須色〕 薄青黒色。 濃青黒色。 〔出土地点〕 主郭。
24	染付(皿) 肥前系 18C中葉 ～末	底部 5.0mm 体部 4.0mm 高台 2.0mm	〔外底〕 中央部は、凹 形(欠損) 〔高台〕 微高。	〔外器面〕 立上り部分 から高台の 外縁にかけて、 3条の界線。 〔内器面〕 3条の界線 と文様痕。 〔外底面〕 蛇ノ目割ぎ。	〔釉色〕 鈍い白色。 〔呉須色〕 薄青黒色。 濃青黒色。 〔出土地点〕 主郭。
25	染付(碗) 肥前系 18C後半	体部下位 3.0mm 上位 3.0mm	〔体部〕 わずかに内弯。	〔外器面〕 1.5mm幅の界 線間に文様。 下部の界線 は二重。 〔内器面〕 1条の界線。	〔釉色〕 灰白色。 〔呉須色〕 薄青黒色。 〔出土地点〕 主郭。
26	染付(碗) 肥前系 18C後半	体部下位 5.0mm 上位 3.0mm	〔体部〕 内弯。	〔外器面〕 文様痕。	〔釉色〕 灰白色。 〔呉須色〕 緑黒色。 〔出土地点〕 G区。
27	染付(筒型碗) 肥前系 18C後半	体部下位 5.0mm 上位 4.0mm 口縁部 3.0mm	〔体部〕 やや外弯。	〔外器面〕 雪輪文様。 〔内器面〕 上位に2条 の界線。	〔釉色〕 白灰色。 〔呉須色〕 青黒色。 〔出土地点〕 主郭。
28	染付(碗蓋) 肥前系 18C後半	体部下位 5.5mm 上位 4.0mm	〔体部〕 やや内弯。	〔外器面〕 雪輪文様と 蓮弁文様。 〔内器面〕 2条の界線。	〔釉色〕 白灰色。 〔呉須色〕 濃青黒色。 〔出土地点〕 主郭。
29	染付(碗) 肥前系 18C後半	底部 10.0mm 体部 4.5mm	〔底部〕 厚壁。	〔内底面〕 中央にコン ニヤク印判 による五弁 花文様周縁 に界線。	〔釉色〕 くすんだ白 灰色。 〔呉須色〕 薄青黒色。 〔出土地点〕 主郭。
30	染付(碗) 肥前系 18C後半	底部 10.0mm 体部 5.0mm	〔底部〕 厚壁。	〔内底面〕 中央にコン ニヤク印判 による五弁 花文様	〔釉色〕 くすんだ白 灰色。 〔呉須色〕 緑黒色。 〔出土地点〕 主郭。
31	染付(碗) 肥前系 18C後半	体部下位 4.5mm 上位 3.5mm 口縁部 3.0mm	〔体部〕 内弯。	〔外器面〕 上位に8mm 幅の界線。 〔内器面〕 上に竹文様。 界線間に斜 め格子文様。	〔釉色〕 くすんだ白 灰色。 〔呉須色〕 薄緑黒色。 〔出土地点〕 主郭。
32	染付(碗) 肥前系 18C後半	体部下位 5.0mm 上位 3.0mm	〔体部〕 内弯。	〔外器面〕 丸文様。	〔釉色〕 くすんだ灰 白色。 〔呉須色〕 緑黒色。 〔出土地点〕 主郭。
33	染付(皿) 肥前系 18C後半	体部下位 5.0mm 上位 4.0mm	〔体部〕 内弯。	〔内器面〕 斜め格子文 様。	〔釉色〕 くすんだ灰 白色。 〔呉須色〕 薄青白色。 〔出土地点〕 主郭。
34	染付(皿) 肥前系 18C後半	体部下位 5.0mm 上位 4.0mm	〔体部〕 内弯。	〔内器面〕 斜め格子文 様。	〔釉色〕 くすんだ灰 白色。 〔呉須色〕 薄青白色。 〔出土地点〕 主郭。
35	染付(皿) 肥前系 18C後半	体部下位 4.0mm 上位 3.0mm	〔体部〕 わずかに内弯。	〔内外器面〕 線と円文 様。	〔釉色〕 白灰色。 〔呉須色〕 青黒色。 〔出土地点〕 主郭。
36	染付(皿) 肥前系 18C後半	体部下位 7.0mm 上位 3.5mm	〔体部〕 わずかに内弯。	〔内外器面〕 曲線と円 文様。	〔釉色〕 灰白色。 〔呉須色〕 青黒色。 〔出土地点〕 主郭。

第7表 出土遺物観察表



第25图 出土遗物实测图②

番号	器種	器厚	形態の特徴	文様・手法・調整	備考
37	染付 (瓶) 肥前系 18C後半 ~19C	底部 7.0mm 外底端 11.0mm 体部 6.0mm	_____	_____	(釉色) 外器面は灰白色。 内器面は無釉。 (出土地点) 主郭。
38	染付 (筒型碗) 肥前系 1780年~ 1810年代	体部下位 3.0mm 上位 3.0mm	〔口縁部〕 丸みを帯びる 〔体部〕 直線的に伸びる	〔外器面〕 雷帯ち笹文様 〔内器面〕 上位に2条の界線。	(釉色) 灰白色。 〔呉須色〕 緑青黒色。 (出土地点) 主郭。
39	染付 (筒型碗?) 肥前系 1780年~ 1810年代	体部下位 2.5mm 上位 1.5mm	(体部) 薄壁。	〔外器面〕 斜めの直線 文様。 〔内器面〕 2条の界線。	(釉色) 灰白(褐)色。 〔呉須色〕 薄青黒色。 (出土地点) G区。
40	染付 (筒型碗) 肥前系 1780年~ 1810年代	底部 4.0mm 体部 4.5	(体部) 直線的に立ち 上がる。 (外底端) 丸みを帯びる	〔外器面〕 七宝繋ぎ文様 最下部に界線 〔内器面〕 体部の立ち 上がり界線。	(釉色) 濃白色。 〔呉須色〕 薄青黒色。 (出土地点) 主郭。
41	染付 (筒型碗) 肥前系 1780年~ 1810年代	体部下位 3.0mm 上位 3.0mm 口縁部 2.0mm	(体部) 直線的に立ち 上がる。	〔外器面〕 文様。 〔内器面〕 体部の立ち 上がり界線。	(釉色) 濃白色。 〔呉須色〕 黒灰青色。 (出土地点) G区。
42	染付 (碗) 肥前系 1780年~ 1810年代	体部 3.0mm	(体部) 内弯。	〔外器面〕 格子文様。	(釉色) 白(褐)色。 〔呉須色〕 濃黒青色。 〔器面〕 貫入あり。 (出土地点) G区。
43	染付 (碗) 肥前系 1780年~ 1810年代	体部 5.0mm	(体部) 内弯。	〔外器面〕 輪廓文様。	(釉色) 白(黄)色。 〔呉須色〕 濃黒青色。 (出土地点) 主郭。
44	染付 (碗) 肥前系 1780年~ 1810年代	底部 5.0mm 外底端 8.0mm 体部 4.5mm	_____	〔外器面〕 最下位に2 条の界線。 〔内器面〕 中央部に文 様周縁に界 線。	(釉色) 濃白色。 〔呉須色〕 薄青黒色。 (出土地点) 主郭。
45	染付 (碗) 肥前系 1780年~ 1810年代	体部 3.0mm	_____	〔外器面〕 矢羽根文様。 〔内器面〕 2条の界線。	(釉色) 灰白色。 〔呉須色〕 薄青黒色。 (出土地点) 主郭。
46	染付 (碗) 肥前系 18C末~ 19C前半	体部下位 3.0mm 上位 2.0mm	_____	〔外器面〕 上位に界線。 〔内器面〕 上位に2条 の界線。	(釉色) 灰白色。 〔呉須色〕 薄青黒色。 (出土地点) 主郭。
47	染付 (蓋) 肥前系 18C末~ 19C前半	体部下位 2.0mm 上位 4.5mm	_____	〔外器面〕 界線と菊文 様。	(釉色) 濃白色。 〔呉須色〕 青黒色。 〔器面〕 貫入あり。 (出土地点) G区。
48	染付 (碗) 肥前系 18C末~幕末	体部下位 3.0mm 上位 2.5mm	(体部) 内弯。	〔外器面〕 円文様。	(釉色) 濃白色。 〔呉須色〕 青黒色。 (出土地点) 主郭。
49	染付 (碗?) 肥前系 18C末~幕末	体部下位 3.0mm 上位 3.0mm 口縁部 2.5mm	(体部) やや内弯。	〔外器面〕 最上位に1 mm幅の沈線。 〔内器面〕 上位に横短 線。	(釉色) 白(黄)色。 〔呉須色〕 墨薄緑黒色。 (出土地点) 主郭。

第8表 出土遺物観察表④

番号	器種	器厚	形態の特徴	文様・手法・調整	備考
50	染付 (皿) 肥前系 18C末~幕末	体部下位 5.0mm 上位 4.0mm	〔体部〕 やや内弯。	〔外器面〕 源氏香文様。 〔内器面〕 文様痕。	〔釉色〕 白灰色。 〔呉須色〕 薄緑黑色。 〔出土地点〕 G区。
51	染付 (碗) 肥前系 1820年~ 1860年	体部下位 3.0mm 上位 2.5mm	〔口縁部〕 直口。 〔体部〕 外器面は直線的に伸びる。器面は半月状を呈する。	〔外器面〕 植物文様。 〔内器面〕 上位に雷文帯。	〔釉色〕 白灰(褐)色。 〔呉須色〕 濃青黑色。 〔出土地点〕 G区。
52	染付 (碗) 肥前系 1820年~ 1860年	体部下位 3.0mm 上位 2.5mm 口縁部 2.0mm	〔体部〕 やや外弯。	〔外器面〕 鶴(?)文様。 〔内器面〕 上位に雷文帯。	〔釉色〕 白色。 〔呉須色〕 青黑色。 〔出土地点〕 G区。
53	染付 (碗) 肥前系 1820年~ 1860年	体部下位 2.0mm 上位 2.0mm	_____	〔外器面〕 界線と文様。 〔内器面〕 雷文帯。	〔釉色〕 白色。 〔呉須色〕 薄青色。 〔出土地点〕 G区。
54	染付 (碗) 肥前系 1820年~ 1860年	体部下位 4.0mm 上位 2.5mm	_____	〔外器面〕 界線。 〔内器面〕 唐草文様。	〔釉色〕 白灰色。 〔呉須色〕 薄青色。 不純物が付着。 〔出土地点〕 G区。
55	染付 (碗) 肥前系 1820年~ 1860年	体部下位 3.5mm 上位 2.0mm	〔体部〕 やや外弯。	〔外器面〕 界線と唐子文様。 〔内器面〕 二重の界線。	〔釉色〕 白灰色。 〔呉須色〕 青色。 〔出土地点〕 主郭。
56	染付 (碗) 肥前系 1820年~ 1860年	底部 5.0mm 体部 4.5mm	_____	〔外器面〕 蓮弁文様。 高台外縁に二重の界線。 〔内器面〕 中央部に文様周縁に界線。	〔呉須色〕 濃青色。 〔出土地点〕 主郭。
57	染付 (碗) 肥前系 19C初~幕末	体部下位 4.0mm 上位 3.0mm	_____	〔外器面〕 若松(?)文様。	〔呉須色〕 薄緑青色。 〔出土地点〕 主郭。
58	染付 (碗) 肥前系 19C初~幕末	体部 3.0mm	_____	〔外器面〕 界線と斜格子文様。	〔呉須色〕 緑青黑色。 〔出土地点〕 G区。
59	染付 (碗) 肥前系 1820年~ 1860年	体部下位 6.0mm 上位 4.0mm	〔体部〕 内弯。	〔外器面〕 格子文様。 〔内器面〕 界線。	〔呉須色〕 青黑色。 〔出土地点〕 G区。
60	染付 (碗) 肥前系 1820年~ 1860年	体部下位 5.0mm 上位 4.0mm	〔体部〕 内弯。	〔外器面〕 格子文様。 〔内器面〕 2条の界線。	〔呉須色〕 薄青色。 〔出土地点〕 主郭。
61	染付 (碗) 肥前系 1820年~ 1860年	体部下位 4.0mm 上位 3.0mm 口縁部 2.0mm	〔体部〕 内弯しながら伸びて、上位で外弯する。	〔外器面〕 界線間に藍乏文様。 〔内器面〕 上位に蓮弁文様。	〔呉須色〕 濃青黑色。 〔出土地点〕 G区。
62	染付 (碗) 肥前系 1820年~ 1860年	体部下位 3.0mm 上位 2.0mm	_____	〔外器面〕 円状文様。 〔内器面〕 雷文帯。	〔呉須色〕 薄青黑色。 〔出土地点〕 G区。

第9表 出土遺物観察表⑤



0 5 10cm

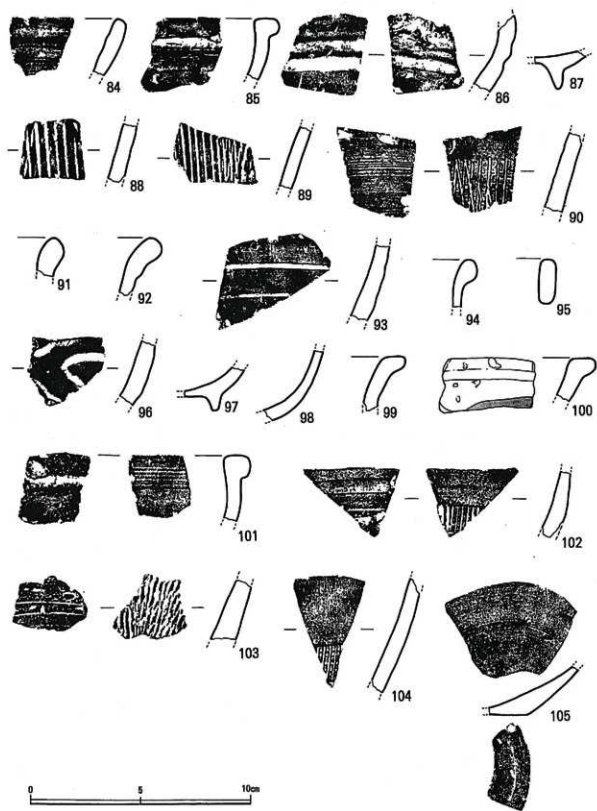
第26图 出土遺物実測图③

番号	器種	器厚	形態の特徴	文様・手法・調整	備考
63	染付(碗) 肥前系 1820年～ 1860年	体部下位 3.0mm 上位 2.5mm	〔体部〕 上位でやや外弯	〔外器面〕 縦位の直線文様と葉状文様。 〔内器面〕 二重の界線。	〔呉須色〕 青黒色。 〔出土地点〕 主郭。
64	染付(碗) 肥前系 1820年～ 1860年	体部下位 3.0mm 上位 2.0mm	_____	〔外器面〕 界線・点描きと弧状文様。 〔内器面〕 12mm幅に8本の横線。	〔呉須色〕 外器面は濃青黒色。 内器面は極薄青色。 〔出土地点〕 主郭。
65	染付(碗) 肥前系 1820年～ 1860年	体部 2.5mm	_____	〔内外器面〕 横波文様。	〔呉須色〕 濃青黒色。 〔出土地点〕 主郭。
66	染付(碗) 肥前系 1820年～ 1860年	体部下位 3.0mm 上位 3.0mm 口縁部 2.0mm	〔体部〕 大きく外弯。	〔外器面〕 上位に薄い界線。 〔内器面〕 四方禪文様。	〔呉須色〕 薄青色。 〔出土地点〕 主郭。
67	染付(碗) 肥前系 19C初～幕末	体部下位 3.0mm 上位 3.0mm 口縁部 2.5mm	〔体部〕 直線的に伸び、上位でわずかに外弯。	〔内外器面〕 上位に薄い界線。	〔呉須色〕 極薄青色。 〔出土地点〕 G区。
68	染付(碗) 肥前系 1820年～ 1860年	体部下位 5.0mm 上位 4.0mm 口縁部 4.0mm	〔体部〕 わずかに内弯。	〔外器面〕 界線と植物文様。 〔内器面〕 界線間に文様。	〔呉須色〕 薄青色。 〔出土地点〕 主郭。
69	染付(碗) 肥前系 1820年～ 1860年	体部 5.5mm	〔体部〕 内弯。	〔外器面〕 点描き文様と界線。	〔呉須色〕 薄青色。 〔内外器面〕 貫入あり。 〔出土地点〕 G区。
70	染付(碗) 肥前系 1820～60年	底部 4.0mm 体部 3.0mm	_____	〔内外器面〕 植物文様。	〔呉須色〕 薄青黒色。 〔出土地点〕 主郭。
71	染付(碗) 肥前系 19C初～幕末	体部下位 3.0mm 上位 2.0mm	〔体部〕 最上位でわずかに外弯。	〔外器面〕 上位に界線。	〔呉須色〕 青黒色。 〔出土地点〕 G区。
72	染付(碗) 肥前系 19C初～幕末	体部下位 3.0mm 上位 2.0mm	〔体部〕 やや内弯。	〔外器面〕 蛸唐草文様。	〔呉須色〕 青黒色。 〔出土地点〕 主郭。
73	染付(碗) 肥前系 19C初～幕末	口縁部 4.5mm 体部 3.0mm	〔口縁部〕 玉縁口縁。	〔内器面〕 格子文様。	〔呉須色〕 薄青色。 〔出土地点〕 G区。
74	染付(碗) 肥前系 19C初～幕末	口縁部 4.5mm 体部下位 3.0mm 上位 2.5mm	〔口縁部〕 玉縁状を呈する。	〔内器面〕 格子文様。	〔呉須色〕 極薄青色。 〔出土地点〕 G区。
75	染付(皿) 肥前系 19C初～幕末	体部下位 3.0mm 上位 3.5mm	〔体部〕 内弯。	〔内器面〕 界線と植物文様。	〔呉須色〕 濃黒緑色。 〔出土地点〕 主郭。
76	染付(皿) 肥前系 19C初～幕末	体部下位 9.0mm 上位 5.0mm	〔体部〕 内弯後に外弯。	〔外器面〕 文様痕。 〔内器面〕 文様。	〔呉須色〕 濃青黒色。 〔出土地点〕 主郭。

第10表 出土遺物観察表⑥

番号	器種	器厚	形態の特徴	文様・手法・調整	備考
77	染付 (皿) 肥前系 19C初～幕末	体部下位 3.0mm 上位 3.0mm	(体部) 上位で外弯。	(外器面) (内器面) 文様。 全面に呉須 が塗られて いる。	(呉須色) 外器面は濃青黒色。 内器面は薄青色。 (出土地点) G区。
78	染付 (皿) 肥前系 19C初～幕末	体部下位 3.0mm 上位 2.5mm	(体部) 上位で外弯。	(外器面) (内器面) 文様。 横線文様を 描いた後、 全面呉須。	(呉須色) 濃青黒色。 (出土地点) 主郭。
79	染付 (皿) 肥前系 19C初～幕末	体部下位 4.0mm 上位 3.0mm	(体部) 内弯。	(外器面) (内器面) 波状文様。 界線。 大形の雷文 帯。	(呉須色) 外器面は濃青黒色。 内器面は薄青色。 (出土地点) 主郭。
80	染付 (鉢) 肥前系 19C初～幕末	体部下位 5.0mm 上位 8.0mm 口縁部 8.0mm	(口縁部) 幅広。	(外器面) (内器面) (口縁部) 弧状文様。 界線。 連円文様。	(呉須色) 濃青黒色。 (出土地点) 主郭。
81	染付 (鉢?) 肥前系 19C	高台幅 4.0mm	_____	(高台外縁) 界線痕。	(呉須色) 濃青黒色(?) (出土地点) G区。
82	陶器 (碗) 肥前系 17C後半～18C	体部 3.0mm	_____	_____	(器色) 黄褐色。 (出土地点) 主郭。
83	陶器 (碗) 肥前系 17C後半～18C	体部下位 3.0mm 上位 2.5mm	(体部) 内弯。	_____	(器色) 黄褐色。 (出土地点) 主郭。
84	陶器 (鉢?) 九州産 18C?	体部 8.0mm	_____	(外器面) 5mm幅のロ ク口痕。	(器色) くすんだ小豆色。 (出土地点) 主郭。
85	陶器 (鉢?) 九州産 18C?	体部下位 5.0mm 上位 6.0mm 口縁部 11.0mm	(口縁部) 幅広。	(外器面) 上位に3mm 幅の横位沈 線。	(器色) オリーブ褐色。 (出土地点) 主郭。
86	陶器 (惣寒頭) 九州産 18C?	体部下位 5.0mm 上位 6.0mm	(体部) 内弯。	(外器面) 3～5mm幅 の横位沈線。 (内器面) 4mm幅の横 位沈線。	(器色) くすんだオ リーブ褐色。 (出土地点) 主郭。
87	陶器 (碗) 天草? 18C～19C前半	底部 3.0mm 体部 6.0mm	_____	_____	(器面) 鉄軸がかかる。 (出土地点) 主郭。
88	陶器 (掻鉢) 天草? 18C～19C前半	体部 7.0mm	_____	(内器面) 2mm幅の掻 き目が、3 ～4mm間隔 で並ぶ。	(器色) くすんだ小豆色。 (出土地点) 主郭。
89	陶器 (掻鉢) 天草? 18C～19C前半	体部 6.0mm	_____	(内器面) 0.5mm幅 の掻き目が、 3mm間隔で 並ぶ。	(器色) くすんだ小豆色。 (出土地点) 主郭。
90	陶器 (掻鉢) 天草? 18C～19C前半	体部 7.0mm	_____	(内器面) 1.0mm幅 の掻き目が、 3mm間隔で 並ぶ。	(器色) くすんだ小豆色。 (出土地点) 主郭。
91	陶器 (寒か鉢) 天草? 18C～19C	頸部 10.0mm	_____	_____	(器色) くすんだ小豆色。 (出土地点) 主郭。
92	陶器 (寒?) 天草? 18C～19C	頸部 10.0mm 体部 7.0mm	(頸部) 外弯。	_____	(器色) くすんだ小豆色。 (出土地点) 主郭。

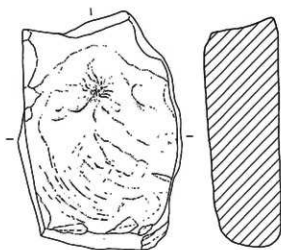
第11表 出土遺物観察表⑦



第27图 出土遺物実測図④

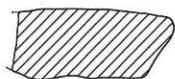
番号	器種	器厚	形態の特徴	文様・手法・調整	備考
93	陶器 (登臺類) 天草? 18C~19C	体部下位 9.0mm 上位 6.0mm	_____	〔外器面〕 2~3mm幅 の横位沈線。 〔内器面〕 袖下に2mm 幅の沈線。	〔器色〕 くすんだ小豆色。 〔出土地点〕 主郭。
94	陶器 (蓋) 天草? 18C~19C	頸部 9.0mm 体部 4.5mm	_____	_____	〔器面〕 鉄粒がかかる。 〔出土地点〕 主郭。
95	陶器 (把手?) 天草? 18C~19C	体部 9.0mm	_____	_____	〔器色〕 オリーブ黄褐色。 内器面の一部はナマ コ色。 〔出土地点〕 主郭。
96	陶器 (袋物) 天草? 18C~19C	体部 8.0mm	〔体部〕 やや内弯。	〔外器面〕 幅2~3mmの沈線文様。	〔器面〕 鉄粒がかかる。 〔出土地点〕 主郭。
97	陶器 (瓶?) 天草? 18C後半~ 19C前半	底部 3.0mm 外底端 8.0mm 対部 5.0mm	_____	_____	〔器色〕 外器面は鈍い小豆色 内器面は褐色。 〔出土地点〕 主郭。
98	陶器 (碗) 肥前系 18C後半 ~19C	体部下位 6.0mm 上位 4.0mm	〔体部〕 内弯。	〔外器面〕 ロク口痕。	〔器面〕 外器面は鉄粒がかかる 内器面は濃白色。 〔出土地点〕 主郭。
99	陶器 (碗) 肥前系 18C後半 ~19C	体部下位 5.0mm 上位 8.0mm 口唇部 10.0mm	〔口縁部〕 「く」の字に 弯曲。	_____	〔器面〕 白化粧。 〔出土地点〕 主郭。
100	陶器 (碗) 肥前系 18C後半 ~19C	体部下位 7.0mm 上位 8.0mm 口唇部 11.0mm	〔口縁部〕 「く」の字に 弯曲。 〔口唇部〕 やや凹む。 幅広。	〔外器面〕 二彩手文様。	〔器面〕 白化粧。 〔文様〕 濃茶色。 〔出土地点〕 主郭。
101	陶器 (碗) 肥前系 18C後半 ~19C	体部下位 6.0mm 上位 7.0mm 口唇部 10.0mm	〔口縁部〕 直に弯曲。 〔口唇部〕 幅広。	〔内器面〕 ロク口痕。	〔器面〕 オリーブ茶色。 〔出土地点〕 主郭。
102	陶器 (擂鉢) 肥前系 18C後半 ~19C	体部下位 7.0mm 上位 5.5mm	_____	〔外器面〕 ロク口痕。 〔内器面〕 0.5mm幅の 掻き目が0.5 mm間隔に並 ぶ。	〔器面〕 濃小豆色。 〔出土地点〕 主郭。
103	陶器 (擂鉢) 肥前系 18C後半 ~19C	体部下位 9.0mm 上位 7.0mm	_____	〔外器面〕 ロク口痕。 〔内器面〕 器面一杯に 掻き目が引かれ ている。	〔器面〕 くすんだ小豆色。 〔出土地点〕 主郭。
104	陶器 (擂鉢) 肥前系 18C後半 ~19C	体部下位 7.5mm 上位 6.5mm	_____	〔内器面〕 1.0mm幅の 掻き目が0.5 mm間隔に並 ぶ。	〔器面〕 小豆色。 〔出土地点〕 主郭。
105	陶器 (土瓶) 肥前系 19C	底部 2.0mm 外底端 9.0mm 体部下位 4.0mm	_____	_____	〔器面〕 灰白色。 〔出土地点〕 主郭。

第12表 出土遺物観察表⑧

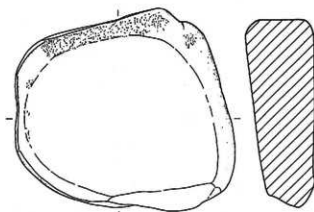


長さ 41.6cm
 幅 29.5cm
 厚さ 12.7cm
 重さ 28.5kg

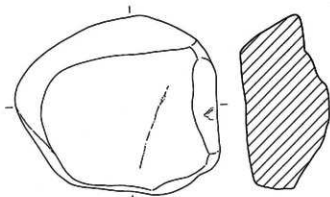
106



長さ 34.4cm
 幅 39.1cm
 厚さ 11.0cm
 重さ 23.5kg

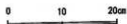


107

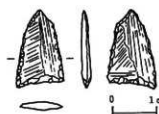


長さ 31.9cm
 幅 36.5cm
 厚さ 15.1cm
 重さ 30.5kg

108



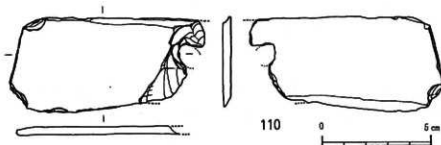
第28図 礎石実測図



局部磨製石鏃（黒曜石）

長さ 1.8cm
幅 1.1cm
厚さ 0.2cm
重さ 0.31g

109



石包丁（安山岩）

長さ 4.3cm
幅 8.4cm
厚さ 0.4cm
重さ 22.60g
未完成品

110

第29図 出土石器実測図

年 代	青 磁	白 磁	染 付	陶 器
16世紀			*	
16世紀前半～中葉			*	
17世紀後半～18世紀前半	*			
17世紀後半～18世紀				**
18世紀		****	***	***
18世紀前半～中葉			**	
18世紀中葉～末			**	
18世紀後半		*	***** **	
18世紀～19世紀前半				****
18世紀後半～19世紀			*	*****
18世紀～19世紀				*****
1780年～1810年			*****	
18世紀後半～19世紀前半				*
18世紀末～19世紀前半			**	
18世紀末～幕末			***	
19世紀		***	*	*
1820年～1860年		*	***** ***** *****	
19世紀初～幕末		***	***** ***** *****	
19世紀～幕末		**		
計	1点	14点	66点	24点

[合計 105点]

第13表 出土遺物年代別分類表

第IV章 ま と め

[1] 城跡地は、城木場地区の西側に位置している。比高差約30mの小高く広い丘陵地で、自然地形を最大限に利用した城跡である。大体、東西方向に主軸の向きがあり、長軸約350m、短軸約175mにもおよぶ大規模なものであるが、丘頂域は、馬の背の様な地形が西側から東側へ伸びて、5箇所の派生尾根が南北方向に張り出した状態にある。丘頂域は、複雑に入り組んでいるが、基本的に、南側一帯が急傾斜地で、北側一帯が緩傾斜地という対象的な地形となっている。北側に段々畑のような階段状地形が重なっているのは、このためである。

地形からすれば、城は明らかに南向きで、本渡方面を意識している事なる。これは史実に見合った城の構造である。中世において、今の五和町は、内陸部と沿岸部を含めて志岐氏の支配地域であったと推定される。この意味からすれば、城木場城跡は内陸部の最南端に位置しているので、沿岸部の佐伊津城跡(現・本渡市佐伊津町、当時は志岐氏の持ち城であった)と共に、志岐氏支配網の南限域を構成する最前線基地であった事がわかる。事実、南域に隣接する本渡地区は天草氏の領地であった。内陸部では、時に応じて、城木場地区周辺で小競り合いが生じたものと思われる。

[2] 発掘調査では、主郭から梁行2間(5.4m)×桁行3間(8.4m)の礎石建物跡(建物1)と2棟の掘立柱建物跡(建物2・3)を検出した。これらの建物跡は、重なり合っているが、[7]で述べるように掘立柱建物が先行して、後に礎石建物が建てられたものと推定される。

建物1は漬物石に転用されている礎石から、かなり、しっかりした建物であった事がわかる。建物2は梁行2間(4.4m)×桁行2間(4.9m)で、小屋掛け程度の建物と考えられる。三川城跡から検出された掘立柱建物跡と極めて似通っている。建物3は、梁行1間(2.0m)×桁行2間(3.7m)で、物置小屋程度の建物である。建物2と建物3の先後関係は不明である。これらの建物跡は、集中して一箇所から検出された。これらの遺構に広がりがない事は、周辺に設定したトレンチの調査結果から明らかである。

三川城跡の建物跡も2棟のみの検出に留まっており、この点においても同城跡との共通性がある。なお、詰めめの城の性格を持つと考えられたF区からは、遺構が検出されなかった。若干の近世遺物が出土したのみである。

[3] 出土遺物は、細片の近世陶磁器が主であった。城時代のものは、わずかに2片のみであった。いずれも16世紀代のもので、その一つは、初頭から中葉のものである。時代別に分類していくと、この2片の後に続くものは、大きく時代が下がって、18世紀後半のものである。これが19世紀後半の幕末まで続いている。

遺物から推測すれば、城木場城跡は、少なくとも16世紀代の城で、廃城後、約1世紀半の間において、再び、城跡地の主郭部分が何らかの形で使用されている事がわかる。建物跡との

関連は、建物2と3が城時代のもので、建物1は、18世紀後半から幕末にかけてのものである。

[4] 内野川流域の三川城跡と下内野城跡も、志岐氏の支配下にあった城跡群の一つと考えられる。発掘調査による城跡の実年代は、いずれも16世紀代で、同時代に3つの城が共存していた事がわかる。各城跡は、実質距離で、城木場城跡-三川城跡が約1.5km、三川城跡-下内野城跡が約2.4km離れている。沿岸部の3城については、実年代が解明されていないが、実質距離で、鬼池城跡-御領城跡が約5.6km、御領城跡-佐伊津城跡が約2.4km離れている。参考地の小浦館跡の比定地は、鬼池城跡-御領城跡の中間地点にある。偶然であろうが、各城跡間の距離は、半里(2km)前後が基準になっている。少なくとも、内野川流域の3城跡は、志岐氏の「円の支配」を構成する城跡群である事がわかる。

[5] 城木場城は、城域を見る限り、非常時に叢集落の住民を城内に取り込む部類の城であろう。城跡地の中には、はっきりとした遺構が残ってなく、ただ城域が広いだけというのがある。これまで、このような城の性格が今一つ、不確かであったが、今回の調査結果と、天草合戦における本渡城の籠城記録等を照らし合わせると、上記の様な考えに至った。戦時には、領民も巻き込まれて生命の危機にさらされた上に、領民の人ざらいが横行したのである。したがって、領主は領民を守る必要があった。

[6] 城時代に見合う出土遺物が極端に少ないので、城木場城の実年代の考察は非常に困難である。しかし、主郭から検出された掘立柱建物跡が、前年度に調査した三川城跡のものと同様に似通っている事に加え、数は少ないが、16世紀代の染付碗も出土しているので、これらを実年代の判定資料にした。即ち、城木場城は16世紀代の城で、志岐氏が天草氏との勢力の接点箇所に築いた内陸部での最前線基地であったと解釈した。城の配置からすれば、城木場城が本城の「一の城」で、三川城が繁ぎの城の「二の城」で、下内野城が詰め城の「三の城」であろう。

出土遺物量を見る限り、最も使用されているのは三川城で、城木場城や下内野城が積極的に使用された痕跡はない。もちろん、廃城後の土地利用も大きく関係するが、城木場城跡の場合、重機を導入する様な地形変更は行われていないという事である。したがって、造成作業によって、遺物が他の区域に移動する事もなく、例え、後世の農耕作業で遺構が攪乱されたとしても、表土の中に遺物がはっきり残っているはずである。

そうすると、三川城を舞台にして戦が展開された事になり、史実面での城木場城の役割は？という事になってくる。これについての考察は、今後の研究課題としたい。

[7] 主郭から検出された礎石建物は、同地点から掘り出された礎石の大きさからしても城木場城時代のものではない事がわかる。志岐氏の本城であった志岐城跡から検出された礎石よりも、二回り大きいという矛盾がある上に、三川城跡と下内野城跡から検出された掘立柱建物跡との共通性もない。むしろ、調査区から出土した18世紀後半から幕末の近世染付に関係する建物と考えた方が通りがよい。掘立柱建物跡とは切り合っていないが、以上の事から、礎石建物跡と

掘立柱建物跡の先後関係を推論した。

なお、この礎石建物の性格については、記録に残っていないが、神社関係のものと思われる。三川城跡には、秋葉社と十五社、鬼池城跡にもやぶさめ神社があり、御領城跡は、寺地になっている事から推論した。現に城木場地区には十五社があり、その前身もしくは関連建物が、城跡地にあったと仮定しても不思議ではない。

[8] 城木場城跡から、土師器がまったく出土しなかった事を記しておく必要がある。これまで調査した下内野城跡や三川城跡からも、同様に土師器の出土は非常に少なく、大きな疑問である。これに対して、中国産の染付をはじめとする、輸入陶磁器の出土が目立つのは、如何なる理由によるものであろうか。

ひごこく けいあん まど えせしあげけいあんちやうのひかえ
『肥後国一慶安四年江戸江差上候御帳之扣』に見える天草地区の中世城跡

江戸幕府は各藩に対して、実態調査のために郷帳、城絵図、国絵図の作成・提出を命じた。慶安・正保・元禄・天保年間の計4回である。この中で、調査項目に古城調査が加えられたのは、城が反乱の拠点となる可能性が高いためと考えられたからであろう。この中で、『肥後国一慶安四年(1651)江戸江差上候御帳之扣』(通称『差出』)は、中世城に関する近世最初の文献となっている。その数は61城で、これは県内で把握されている中世城数の約1割にあたる。これらの選出基準は不明であるが、少なくとも報告に値する城跡であった事は確かであろう。

この中で、天草地区は最も多く、15城の記載があり(下島で9城、上島で6城)、報告数の約25%を占めている。かなりの高率であるが、これについては、寛永14年(1637)に起こった「天草・島原の乱」が大きく関係していると思われる。乱後の後遺症で、天草地方の城は、幕府から徹底的に調査する様な指示があった可能性が高い。

事実、細川忠利は、乱後に松平信綱が島原・天草を巡視した目的について、①乱後の仕置きのため、②農民の武器を収奪させるため、③各地の古城を破却させるためなどの職がある旨を述べている(註A)。また、乱当時、上使として有馬に来たことのある大目付の兼松弥五左衛門正直も、慶安3年7月7日に天草に渡って、志岐や富岡を巡視している(註B)、翌年の慶安4年3月17日には、乱当時豊後目付として現地と幕府の連絡に当たっていた川勝丹波守広綱が、富岡城目付を勤めていた杉原四郎兵衛正永と、わざわざ富岡・有馬の城跡を巡視しているのがある(註C)。さらに、また、天草警備を命ぜられていた細川光尚も、慶安2年2月8日、参勤上京を前に天草見分のため渡海しているのをみれば(註D)、乱後、天草や島原の動静に(殊に古城にも)、特別の注意が払われていたことは明白である。

実際、かつての天草五人衆の本城は、総て調査が行われている。他の地区では、明らかに調査漏れと思われる城跡があるだけに特異である。この事に加えて、森下功氏は、『差出』の最後に記された城木場城が一丁の最後であるのに、奥書も付いていないので、若干の落丁があるのではないかと推論されている。となれば、天草の記載城は、あと少し、数を増す事になる。

五和町では、下内野城と城木場城の2城が記載されている。これらは、内野川流域の城跡という共通点があるものの、両城の間にある三川城が欠落している。さらに、海岸沿いの鬼池城と御領城も記載から漏れている。

【関係年表】上記事情を年表にすれば、次の通りである。

寛永15年(1638)2月28日 原城落ち、乱、終息す。

3月9～15日 追討上使松平信綱等、島原・三角・大矢野・上津浦・河内浦・富岡等を巡視す。

- 寛永15年(1638) 4月4日 天草収公。
 4月14日 天草、山崎家治領となる。
 5月28日 山崎家治、富岡居城を命ぜらる。
- 寛永18年(1641) 9月10日 山崎家治、四国丸亀に転封。天草は幕府領となる。
 9月13日 熊本藩に天草在番を命ぜらる。
 9月20日 鈴木重成、天草の代官を命ぜらる。
- 正保4年(1647) 11月18日 寺沢堅高、江戸にて自害す。
 11月26日 唐津寺沢領収公、大目付兼松正直・使番齋藤利政。鈴木重成も立ち会う。
- 慶安元年(1648) 4月 異国船の儀につき、天草及び肥後領内に厳重取締命ぜらる。
 7月8日 天草等各地の武器調べあり。部分御日記
- 慶安2年(1649) 2月8日 光尚、天草見分渡海。
 7月8日 天草へ絵図の儀につき、歩の小姓田浦甚左衛門他一名、熊本より遣わさる。
- 慶安3年(1650) 7月7日 熊本への上使朽木植綱・大目付兼松正直、志岐・富岡巡見。
- 慶安4年(1651) 3月17日 目付川勝広綱・杉原正永、天草へ渡り富岡および有馬の城跡等巡見。
 8月8日 目付川勝広綱・杉原正永、熊本発、江戸へ帰る。

〔註A〕【總考輯録】寛永15年(1638) 4月12日

- 一 寺沢は天草被 召上、唐津は無相道被仰付候事、
- 一 伊豆殿・左門殿逗留ノ輪原・天草之御仕置、又百姓武器など御取被成候、又国々石垣など残り候古城などハ石垣をのけ候へとの御用と下々沙汰仕候、

〔註B〕兼松弥五左衛門(正直) 一五〇〇石・大目付

- ①乱当時有馬への使者として寛永14年12月25日江戸発、15年1月7日有馬に至る。
- ②正保4年、寺沢堅高自殺・寺沢家断絶の際、上使として唐津に至り、鈴木重成とも会う。
- ③慶安3年、細川光尚没、翌年綱利相続に当り、上使として熊本に至り、ついでに志岐・富岡巡見(7月7日)〔松井家先祖由来付〕

〔註C〕川勝丹波守(広綱) 乱当時豊後目付・三五七〇石

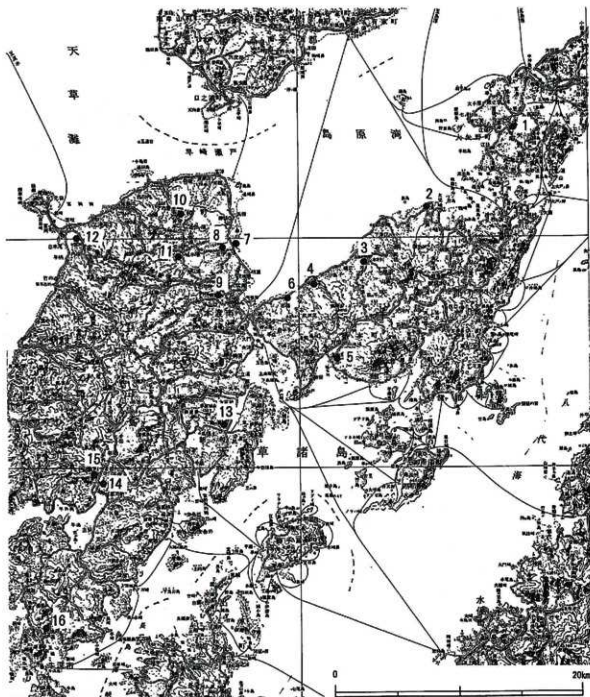
- ①乱に当り寛永14年11月9日、豊後目付を牧野伝藏・林丹波守に代わって佐々権兵衛と共に勤番、幕府と現地連絡に当る。
- ②慶安4年3月17日、乱当時、富岡城目付であった杉原正永と共に、富岡・有馬などを巡見している。
〔松井家先祖由来付〕

杉原四郎兵衛(正永) 書院番・一〇〇〇石

- ①乱に当り富岡城目付を命ぜられ(2月8日)勤番。
- ②慶安4年3月17日、目付として再び富岡および有馬の城跡巡見。〔松井家先祖由来付〕

〔註D〕細川光尚

- ①乱に当り帰国を命ぜられ、寛永14年12月11日、上津浦出陣、翌年正月有馬出陣。
- ②寛永18年、忠利没後、熊本藩主となる。
- ③慶安2年2月8日、天草渡海。〔松井家先祖由来付〕



第30図 天草地区の中世城跡

番号	城名	種別	間(郷)	所在地	城関連地名	備考
1	中村古城	平山城	420	大矢野町 大字中 字城本	大手口	大矢野氏の本城。大矢野城ともいう。 町立大矢野中学校の敷地となっている。
2	大浦古城	山城	270	有明町 大字大浦 字勢溜		大浦港の北西側に突き出した丘陵地が 城跡。復讐の基地との見方もある。 野首(鞍部)に堀切。
3	上津浦古城	山城	390	有明町 大字上津浦 字城ヶ島 戸石川	堀	上津浦氏の本城。北東側と南西側に 並列する二つの小山で構成される。 城ヶ島と呼ばれる北東側が本体である。

第14表 天草地区の中世城跡一覧①

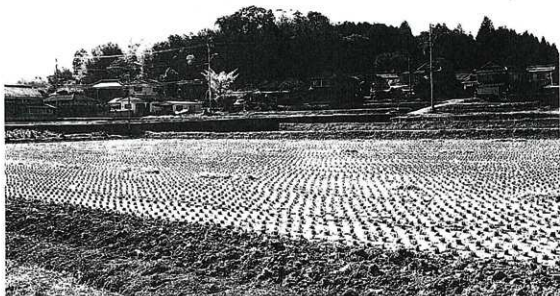
番号	城名	種別	間(規模)	所在地	城関連地名	備考
4	大鳥子古城	山城	350	有明町 大字大鳥子 字古城		大鳥子地区の南側に城跡がある。山城兵藤太郎(志岐氏の城代)の居城と伝わる。
5	湯船原古城	山城	420	榎本町 大字湯船原 字本丸	城之尾	榎本氏の本城。榎本漁港近くの山が城跡。連郭式の城で、鞍部に堀切がある。江戸期の寺沢時代には、郡代所となった。
6	志柿古城	平山城	250	本渡市志柿町 字高垣 船江		志柿町に二つの城がある。隣接しており、一つの城と見なされる。「八代日記」天保8年(1565)7月9日に城の関連記事がある。
7	佐伊津古城	山城	234	本渡市 佐伊津町 字城廻		海に突き出した丘陵地が城跡である。連郭式の城で、石垣や井戸が残る。城置の字名も残っているが、中心部は市営住宅地になっている。
8	同村古城 (在郷城)	平山城	300	本渡市 佐伊津町 字風呂ノ迫	高城	在郷地区の城跡を示すものと思われる。高城と呼ばれる丘陵末端部で、尾根筋には「火立ノ尾」と呼ばれる箇所もある。
9	馬場古城	山城	420	本渡市本渡町 字本戸馬場	本丸 一の丸 二の丸 出丸	天草氏の居城。連山の尾根筋を利用した連郭式の大規模山城。山腰一帯に城平の字名が残っており、尾根筋に7箇所の平場がある。
10	下内野古城	山城	360	五和町 大字下内野 字城山		内野川流域の右岸に築かれた連郭式の城。発掘調査により、南北朝を上限とし、17世紀初頭を下限とする城と判明。
11	城木場城	山城	260	五和町 大字城木場 字南風ノ元	城の尾	内野川流域の左岸に築かれた大規模城跡。発掘調査を実施したが、城時代の遺物が極度に少なかった。16世紀代の城である。
12	志岐古城	山城	900	荻北町 大字志岐 字城山	城山城の平 城下 陣内	志岐氏の本城。発掘調査で、礎石遺物を有する16世紀後半の城と判明。志岐地区は大規模な集落。山頂の高台区域を中心とする連郭形式の城で、鞍部に堀切がある。
13	小宮堀古城	山城	800	新和町 大字小宮地 字城ノ平		町役場の北側裏山にある。連郭式の城で、尾根筋に堀切がある。
14	下田古城 (下田城)	山城	270	追地を挟んだ丘陵地に、2城がある。南側が下田城、北側が河内浦城(崇園寺の裏山)と呼ばれる。		帯状平場が東西に並列する城で、鞍部に堀切が無く、縄張りが不確定。発掘調査で、枕列を有する、16世紀
15	河内浦城 (河内浦城)			河内浦町 大字河内浦 字湯立免	中葉から後半の城と判明。天草氏の本城。単郭形式の城で、鞍部に小規模な堀切がある。発掘調査で、掘立柱建物を有する16世紀中葉から後半の城と判明。	
16	久玉古城	山城	300	牛深市久玉町 字吉辺川		湾に面して築かれた城で、連郭式の海城である。黒指定史跡で、例外的に破城の程度が低く、今も本格的な石垣が残っている。発掘調査で、16世紀後半の城と判明。

第15表 天草地区の中世城跡一覧②

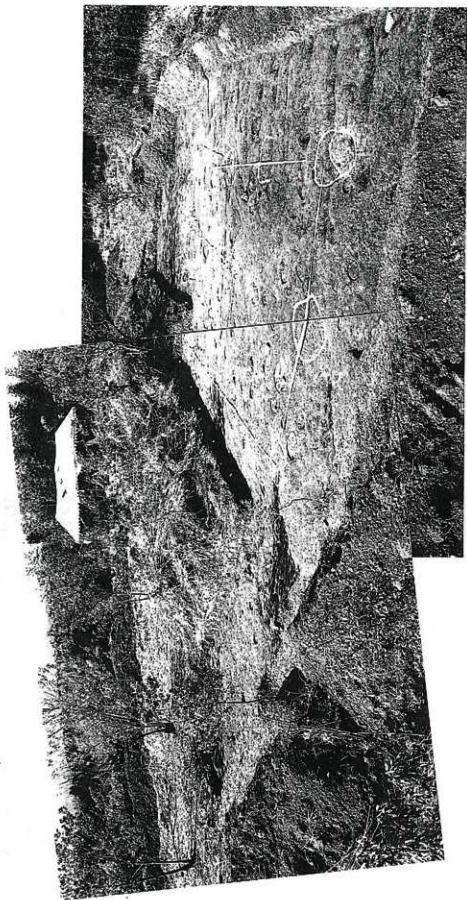
写 真 图 版



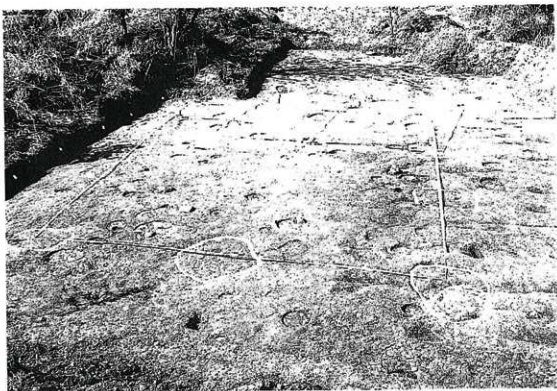
図版 1 城木場城跡遠景（北側より）



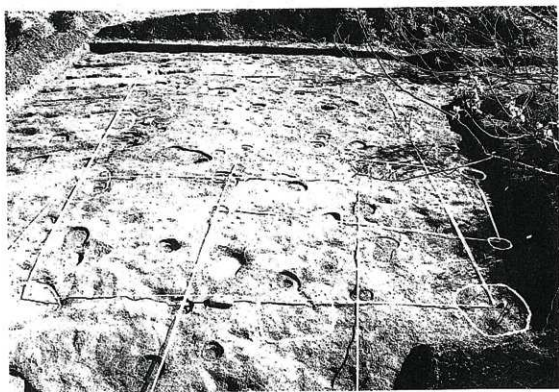
図版 2 城木場城跡遠景（東側より）



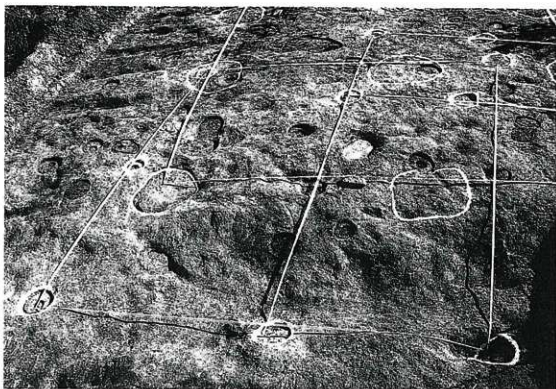
図版3 2 トレンチ全景（南西側より）



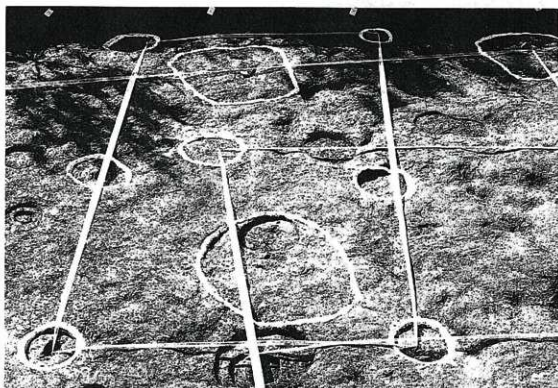
図版4 建物1（南西側より）



図版5 建物1（北東側より）



図版6 建物2 (北東側より)



図版7 建物3 (南東側より)



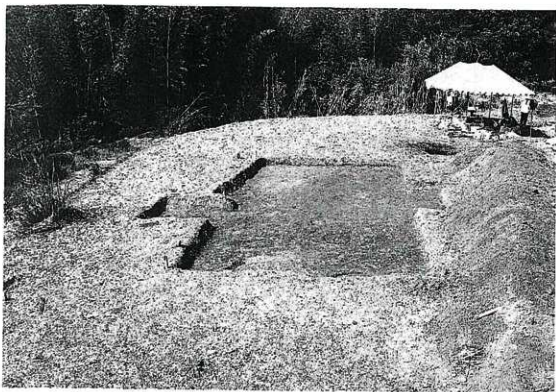
図版 8 8トレンチ全景



図版 9 杭列
(柱穴内に石が混入)



図版10 杭列(柱痕)



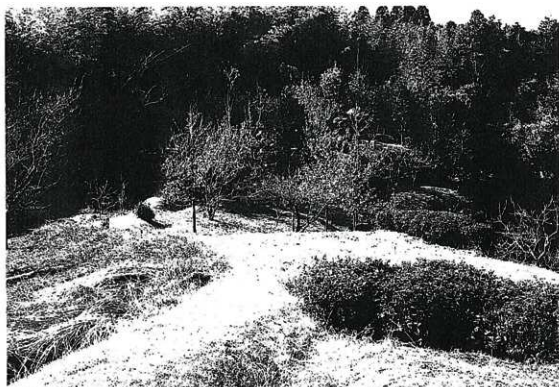
図版11 主郭-① (1トレンチ)



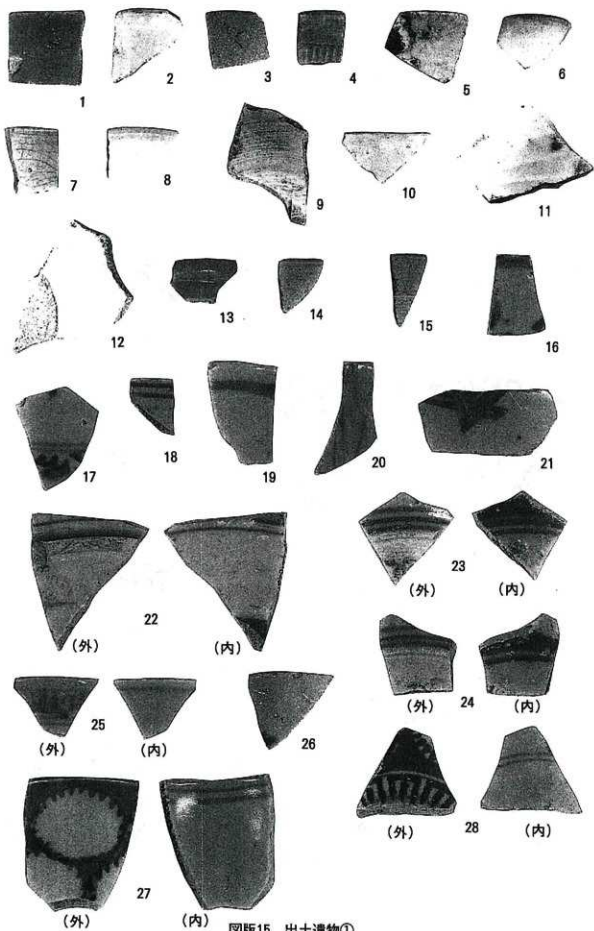
図版12 主郭-② (4トレンチ)



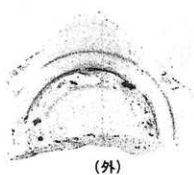
図版13 主郭一②



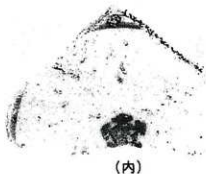
図版14 丘頂ライン（野首地形）



図版15 出土遺物①



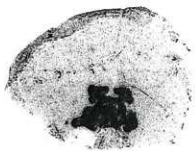
29



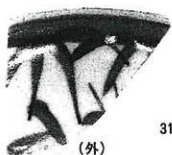
(内)



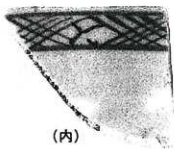
30



(内)



31



(内)



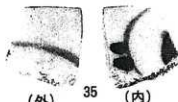
32



33



34



(外)



(内)



(外)



(内)



37



(外)



(内)



(外)



(内)



(外)



(内)



41



42

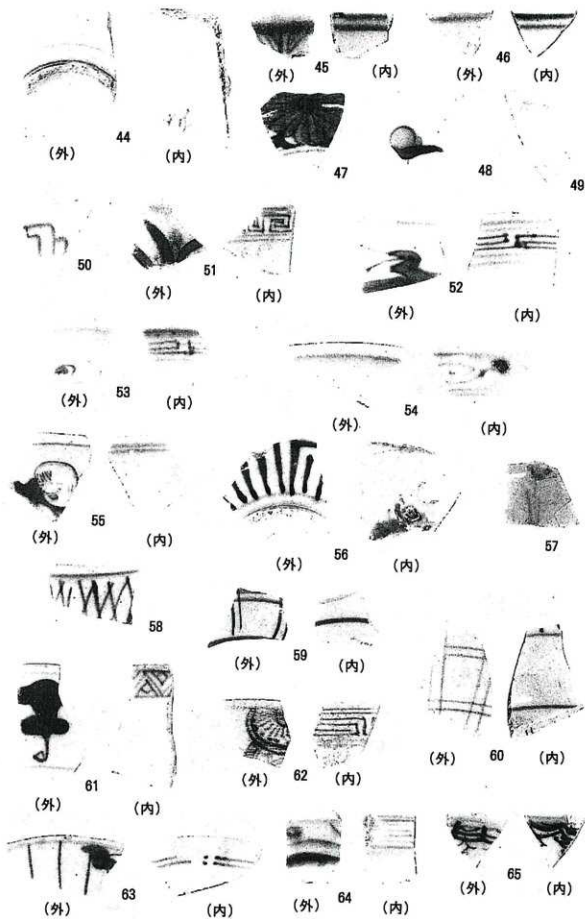


(外)

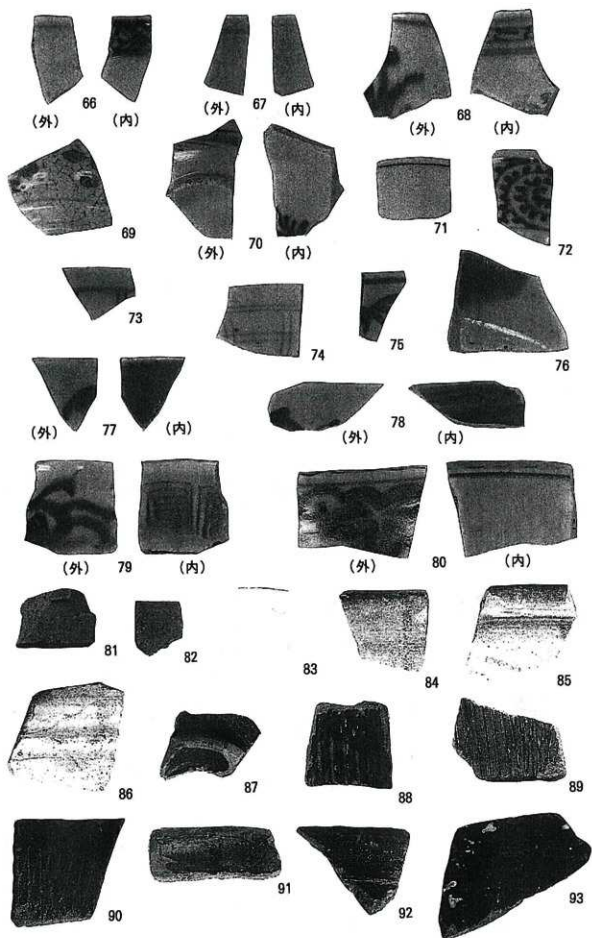


(内)

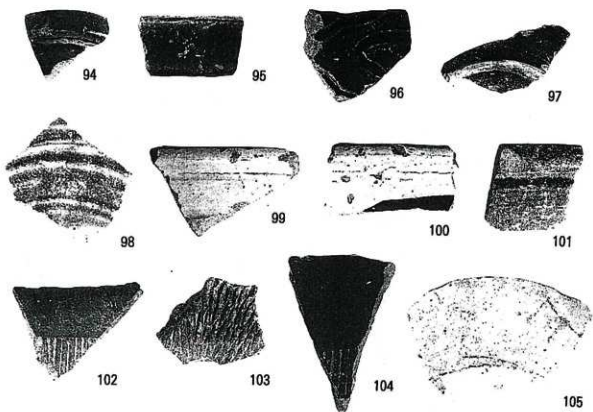
图版16 出土遺物②



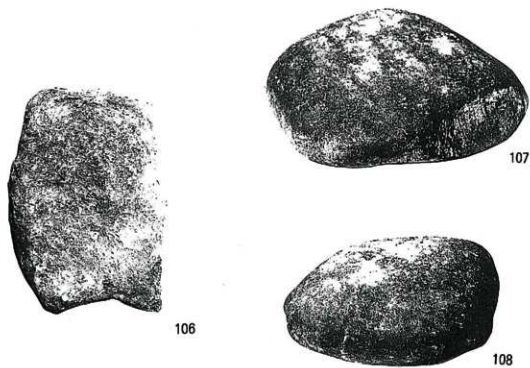
圖版17 出土遺物③



図版18 出土遺物④



図版19 出土遺物⑤



図版20 礎石

〔資料六〕 松山儀左衛門墓碑銘

(荒河内 観音寺 墓地)

元 寛文十年戊十月二日

祖 松山儀左衛門貞重墓

享年五十

義徳院安窓要心居士

湖海院珊月妙技大姉

元禄十一年寅八月二日

松山儀左衛門妻 肥後国櫻間娘

明治三十四年辛丑十月

松山千太郎建立(再建なり)

(裏面)

松山貞重其父外祖外記、肥前国高木郡奉仕干有馬左右衛門
尉藤原直純公、貞重三歳而喪其父、元和九年主君有馬公転
国干日向、貞重幼稚而不能伴隨、天草富岡城代三宅氏以縁
故依之、貞重十七歳時及三宅重利死干妖奴四郎、寔後其男
藤右衛門仕干細川家、貞重有慮不敢適從

卜地於本郡城木場邑住焉、外雖有經歷之書類不刻干茲焉

七十五翁螺雲敬者

(同 三女) 五 野

慶應三卯年七月十日歿、戒名種芳禪孩女。

(全 四女) 直 加

本戸村木山重吉の妻となる。明治四未年十二月廿九日生まれ竹野と名附く。全七戌年三月十日直加と改む。全廿亥年四月六日木山家に縁嫁。

(全 五女)

城河原村大字荒河内松本屋、猪股多賀治の妻となる。明治六酉年六月十六日生まれ、全廿六巳年二月廿三日猪股家に縁嫁。

九世 千 太 郎

松山千太郎と號す。八世重茂の長男として、文久二戌年八月十八日生まる。明治十五年六月六日家督を相續なし、大正十二年九月六日六十二歳にて病歿。戒名不老軒南山保壽居士。妻は先妻ふじえ、佐伊津村中村房松の長女にして、井手村長嶋正之の養女なり。明治三午年十二月三日の生まれ、全二十亥年四月五日縁付き、全廿五辰年潤六月十二日二十三歳にて逝く。戒名養成軒南室妙壽大姉。後妻ふくは本戸村木山惟一の女なり。明治八亥年七月一日生まれ、全廿六巳年二月廿三日縁嫁。

(千太郎の次男) 正 重

明治廿四卯年三月十四日生まれ、同年六月廿二日に病歿。

(全 三男) 松右衛門

(全 四男) 憑 輔

(全 長女) きぬよ

(全 次女) はま

(全 三女) はる

(全 四女) まつ

明治四十三戌年三月廿三日生まれ、全年十一月十八日二江山本與作宅に於て病歿、戒名孤峯松秀禪孩女。

(全 五女) つる

明治四十三戌年三月廿三日生まれ、全年六月一日井手村大瀧酒井六太郎宅に於て病歿、戒名玉顔智光禪孩女。

十世 榮 重

松山榮重と號す。九世千太郎の長男として、明治廿二巳年三月一日生まる。妻は長崎市本大工町森田要吉の長女みえ、大正二年三月に縁嫁。

〔「天草史談」二・三号 昭和十一年四月・五月〕

(全 長女) す み

富岡町五丁目大坂屋昌橘の妻となりミスと呼ぶ、弘化四未十二月十日入嫁。明治廿四卯年八月五日、六十五歳にて歿す、法名寶池院釋紫蓮大姉。

(同 二女) ち せ

城木場村松屋、松山政市の妻となり重野と呼ぶ、安政元寅年四月入嫁。大正二巳年七月十六日七十五歳にて逝く、戒名寂光軒德童智照大姉。

(同 三女) や ゑ

大島子村益田惠助の先妻なり。萬延元申年五月四日十八歳にて歿す、法妙釋尼妙寶大姉。

(同 四女) た か

佐伊津村庄屋、中村吉順の後妻として、明治二巳年二月十三日縁嫁。明治六酉年閏六月十二日逝く、法名清節院釋尼妙高大姉。

(同 五女) ち ゑ

高濱村上田元市の妻となり、聲と呼ぶ、夫の死亡に會ひ親里に歸る。後又二江村池田靜衛方に嫁し、大正七年十月三十日逝く、戒名温光軒智室妙惠大姉。

八世 重 茂

松山儀七郎と號す。亡世福重の長男として、天保六未年四月廿一日生まる。明治二巳年正月より家督を相續なし、同十五年六月五日四十八歳にて病歿、戒名聖諦軒大法一義居士。妻は高濱村上田源太夫の女カシメ。同女弘化三年年三月廿六日生まれ、萬延元申年三月廿一日縁嫁、大正七年十一月八日七十三歳にて病歿、戒名松仙軒梅林妙竹大姉。

(重茂の次男) 種 吉

明治十丑年七月廿六日三歳にて歿、戒名法池乘蓮禪孩兒。

(同 三男) 團 一郎

明治十三辰年十一月十六日四歳にて歿、戒名楓林良錦禪孩兒。

(同 四男) 滿 吉

明治十六未年七月廿七日三歳にて歿、戒名芝山幻蓉禪孤兒。

(同 長女) 多 惠

文久元酉年一月十三日生まれ、同廿六日歿、戒名梅香自薫孩女。

(同 次女) 峯

慶應元巳年十二月三日歿、戒名露顏紅英禪孩女。

保十三寅年六月十日に逝き、戒名圓照軒明臺貞鏡大師。

(友八の長男) 彦 吉

天保十三寅年二月十日三歳にて歿す、法名真空良實孩
子。

(全長女) 里 壽

天保十四年卯年四月廿三日にて歿す、法名清光智淨孩
女。

(重隆の三男) 伊 織

松山嘉八と號す。高濱村神官宮口左馬輔方へ養子に行きし
が、南高来郡口ノ津村にて疱瘡に罹り相果つ。時に天保九
戌年十一月廿一日、彼十九歳の折りなり。

(全四男) 源 藏

松山源六と號し、幼名只八。明治三年年三月分家いたす。
明治廿五辰年六月十四日七十三歳にて病歿、戒名靈鏡不昧
居士。妻は本戸馬場村堀田順太郎の長女ちと。

(源藏の長男) 松 太

妻は佐伊津村中村房松の次女なり。

(全 長女) と も

志岐村錦戸平六伴山本繁七の妻となる。

(重隆の長女) い ち

富岡町五丁目大坂屋本家、櫻井吉郎兵衛の妻となる。萬延

元申年八月廿四日逝く、法名愛語院釋尼妙精大師。

(全 二女) す も

今富村庄屋上田順一郎の後妻となる。慶應三卯年十月九日
歿、戒名貞芳院藏戒壽操大師。

(全 三女)

高戸村佐々木守禮の妻となる。天保十二年十月二日に逝
き、法名清操院釋尼妙界大師。

(全 四女) さ だ

井手村大庄屋長島市郎左衛門の妻となる。明治十四巳年二
月六日歿、戒名貞正院禪室妙定大師。行年七十一歳。

七世 福 重

松山儀八郎と號す。六世重隆の長男として、文化七年に生
まる。明治六四年一月十五日、六十四歳にて病歿、戒名松
壽軒禪月道光居士。妻は今富村庄屋上田養右衛門の女なり。
明治五申年二月十一日五十七歳にして逝く、戒名高臺軒鏡
空清光大師。俗名喜茂。

(福重の次男) 定 市

天保十三寅年九月四日、六歳にて病歿、戒名玉光素輪童子。

(全 三男) 藤 一郎

安政三辰年九月朔日病歿、戒名智山秀苗孩子。

戒名獨愼軒澄翁家興居士。妻は先妻に松山惠吉の六女たに、文化五辰年八月廿七日歿す、戒名性外元底信女。後妻は富岡町四丁目天満屋圓右衛門の女、嘉永七寅年四月廿六日逝く、戒名寛室妙容大姉。

(有滋の長男) 八 郎

明治十五年十月廿二日歿す。先妻は井手村長嶋森右衛門の女、後妻大浦村小崎六郎左衛門の女なり。

(全二男) 耕 六

牛深村遠見番青木惠一郎方へ養子に行く。

(全三男) 惣三郎

明治三年年中松山啓八方に養子に行き、明治十五年六月八日重病にて歿す。

(全四男) 忠 八

天保十四卯年四月廿四日若死。

(全五男) 政 市

嘉永六丑年三月十日赤迫へ分家。明治廿二丑年十月廿三日歿す。妻は松山儀八郎の二女しげの。

(全長女) 富岡町年寄鶴田平七の妻となる。

(全次女) 龜川村山方役高田順平の妻となる。

(全三女) 龜川村庄屋渡邊彦助の妻となる。

(榮重の四男) 龜 藏

天明二寅年九月廿七日病歿、戒名楓山幻紅童子。

(全長女) 友 い

明和元年九月十一日病歿、戒名貞妙鏡童女。

(全次女) ひ で

高濱村庄屋上田源太夫の妻となる。天保五年十月四日歿、戒名淑愼院大隱顯孝大姉。

(全三女) さ わ

富岡町五丁目大坂屋本家、櫻井甚三郎の妻となる。文化七年九月八日歿、法名探勝院釋妙近大姉。

(全四女) み と

初め富岡町五丁目田中兼助に嫁ぎ不縁、次いで大島子村三木屋兼三郎の妻となる。弘化三年四月廿日六十三歳にて歿す、法名釋尼定縁貞心大姉。

六世 重 隆

松山儀一郎と號し、幼名家傳。五世榮重の長男として明和四年に生まる。嘉永元年八月八日八十二歳にて病歿、戒名德隣軒龜嶽萬慶居士。妻は始め井手村長島治兵衛の女よねを迎へしが不縁、次いで富岡町山方役江間新五右衛門の女さのを娶る。天保十亥年七月十九日五十九歳にて歿す。戒名雲松軒鶴室千壽大姉。

(重隆の次男) 友 八

松山八兵衛と號す。天保七申年十月七日分家して改名。後故あつて佐伊津村眞言宗阿彌陀寺に於て出家得道、奉覺法師と稱す。弘化元辰年九月十五日三十一歳にて病歿、戒名巍然軒泰嶽淨安居士。妻は本村の醫生久保山文臺の女、天

(盛重の四男) 明重

松山八十七と號し、幼名太吉。文政三辰年九月七日に病歿、戒名元明自亨居士。妻は最初高濱村庄屋上田傳五右衛門の女しかを迎へしが、享和三亥年八月廿四日に病歿、戒名地動妙瑞大姉。後妻に御領村石本治兵衛の肝入りにて、長崎荒木爲之助の女さほ(長崎井戸屋與兵衛の後家)を入れしも不縁。更に高濱村上田源作の肝入りにて、内田村庄屋村上覺兵衛の女させ後妻として入嫁、時に文化五辰年六月廿日。

(明重の嫡子) 幼名善之助

高濱村庄屋上田源太夫方へ養子に行き、上田順太郎と稱す。妻は先妻に上田源太夫の女、後妻は城木場村松山儀一郎の二女すも。

(全次男) 猪吉郎

幼名儀之助、家督を繼ぐ。妻は松山伊與助の五女みほ。

(全長女) さい

牛深村遠見番青木恵一郎の妻となる。

(全次女) きほ

小田床村伊野淳象の妻となる。

(盛重の長女) 喜和

井手村長嶋豊助の妻となる。文政七申年八月廿一日に歿、戒名光照齋大圓智鏡大姉。

(全二女) 里津

宮地岳村中西民助の妻となる。寛政十二申年五月六日に歿、戒名智了院桂馨安林皎月大姉。

(全三女) そね

本戸馬場村吉田益左衛門の妻となる。文政七申年閏八月二日歿、戒名一様妙蓮大姉。

(全四女) うね

宮地岳村庄屋中西龜右衛門の妻となる。文化三寅年十月三日四十八歳にて歿、戒名圓池院蓮馨花香妙逸大姉。

五世 榮重

松山儀左衛門と號し、幼名千太郎。四世盛重の長男として、元文四年に生まる。文化十二亥年四月十五日七十七歳にて病歿、戒名淵駄軒寂翁道照居士。妻は富岡町四丁目大和屋茂兵衛の女なり。天保四巳年一月十五日九十一歳にて歿す。戒名淵心軒寂然自照大姉、俗名おのし。

(榮重の次男) 本藏

松山啓八と號す。尤も幼年御領村井上文次右衛門に出迹せしも後不縁、文化四卯年より城木場村城下に居住す。天保十二丑年十月十日七十三歳にて病歿、戒名大道軒德操玄澤居士。妻は御領村石本勝之丞の女なり。嘉永四亥年十一月九日八十三歳にして逝く、戒名妙窓軒清菴梅薫大姉。俗名てい。

(全三男) 有滋

松山辨藏と號す。弘化四未年三月三十日七十五歳にて病歿、

四世 盛重

松山次郎兵衛と號し、幼名善太郎。三世重信の長男として、正徳四年に生まる。明和六丑年十二月九日五十六歳にて病歿、戒名牢容軒懺若恕堅居士。妻は富岡町大坂屋本家、櫻井甚左衛門の次女なり。寛政十二申年三月朔日八十三歳にて歿す。戒名孝順軒戒寶持貞大姉、俗名おはん。

(盛重の次男) 治重

松山惠吉と號し、文化五辰年十二月八日病歿、戒名龜山良壽居士。妻は俗名とも、富岡町壺丁目米屋嘉兵衛の姉なり。文政二巳年九月廿一日に逝き、戒名惠山壽光大姉。

(治重の長男) 茂作

戒名水雲良昌信士

(全一女) やよ

大鳥子村益田種藏の妻となる。

(全二女) なか

久玉村大庄屋中原新吾の妻となる。

(全三女) くみ

中田村庄屋大道作右衛門の妻となる。

(全四女) ゆい

井手村長島森右衛門の妻となる。

(全五女) わか

城木場村松山林右衛門の先妻。

(全六女) たに

松山辨藏の先妻。

(全次男) 猪久藏

妻は大鳥子村三好屋武右衛門の女なり。

(盛重の三男) 種重

松山伊與助と號し、幼名傳藏。文政十二丑年十二月三日に病歿、戒名大仙軒英嶽良雄居士。妻は先妻に大多尾村庄屋武部種兵衛の女を迎へ、後妻に御領村池田富助の女を娶る。該女天保六未年閏七月四日に逝き、戒名月心軒慈憐貞光大姉。

(種重の長男) 林右衛門

先妻に松山惠吉の五女わか、後妻は下河内村庄屋佐藤彌右衛門の女なり。

(全二男) 勝之助

先妻に井手村長島龍右衛門の女、後妻は下河内村庄屋佐藤彌右衛門の女なり。

(全長女) ます

坂瀬川村庄屋岡部榮七郎の妻。

(全二女) きの

本戸馬場村大庄屋木山重兵衛の妻。

(全三女) ゑみ

今富村庄屋上田養右衛門の妻。

(全四女) つく

崎瀬村山方役奥山祐右衛門の妻。

(全五女) みほ

城木場村松屋猪吉郎の妻。

衛門の二男一女を生む。明和元年九月十三日九十歳にして歿す。戒名玉雲元珠信女、墓所は瑞林寺々門の南に有り。因に清左衛門の姉は、三世重信の養娘として二江村庄屋長島甚左衛門に嫁せられ、弟武左衛門は分家して新町に居住せり。

(全二女)

大浦村庄屋小崎家に嫁し、治右衛門を生む。寛延元寅年十月廿四日没、戒名供淨養林信尼。

三世 重 信

松山儀左衛門と號し、幼名儀八。二世重治の長男として、天和三年に生まる。寛保三亥年一月八日六十一歳を以て病歿、戒名心光軒智巖宗惠居士。妻は幼名おはる、俗名ちやう、小宮地村志築作平の次女なり。寶曆十二年十一月廿九日に歿す、戒名圓融軒徳岩壽相大姉。

(重信の次男) 則 之

松山覺兵衛と午號し、幼名傳之助。故あつて寛政四子年五月下河内村に引越し、寛政八辰年七月廿二日七十三歳にて病歿。戒名盛雲壽榮居士。妻は俗名おふじ、井手村大庄屋長島市兵衛の女なり。安永六酉年十月十二日四十歳にして逝き、戒名玉林智光大姉。後妻に下河内村庄屋佐藤周藏の女を迎ふ。

(則之の長男) 熊 助

故あつて依然下河内村に居住。妻は城木場村庄屋金子半左衛門の女なり、天保十四卯年三月十三日歿、戒名長園念久大姉。

(全二男) 恒 助

(全三男) 岩 藏

(全四男) 藤 吉

(全長女) り さ

大島子村益田奥左衛門の妻となる

(全次女) た け

下河内村庄屋佐藤彌右衛門の妻となる

(重信の長女) と ら

富岡町五丁目田中家に嫁し、宗兵衛の妻となる。安永四年十月十八日逝き、戒名慈照院忠譽義圓妙節法尼。墓所は温光軒智室妙惠大姉と合祠。

(全次女) り ん

高濱村庄屋上田勘右衛門の妻となり、寛政二戌年十一月七日に歿す。戒名瑞光院玉窓清林大姉、墓所は高濱村荒尾嶽に在り。

戒名利應軒元室自亨大姉。全人もと富岡町五丁目田中次郎兵衛の養女なり。實母は志岐村紺屋町の仁、曾つて富岡町大坂屋に縁付き、二女を生みしが、夫の死に曾ひ娘兩人を召し連れ歸る。即ち長女を田中家の養女となし、次女は後富岡町壹丁目松屋に縁付けるに至る。然るに切角松山家に迎へられし自亨大姉こと、「若死に依り當家危なく相見え候處、實母の働きを以て家承く相立つ。依之當家にとり大切の人也、未々迄の大切に可致もの也。法妙釋壽貞信尼、墓碑は當家墓所の傍に在り」と。

(重治の次男) 吉 正

松山市郎右衛門と號す。明和七寅年七月十一日七十七歳にて病歿、戒名壽覺淨榮居士。妻は大江村先の大庄屋赤崎半左衛門の女、天明六年五月廿四日に歿す、戒名戒岸持光信女。

(吉正の長男) 儀兵衛

別に貳間半六間の家を立て、野右衛門と云ふもの、姉婿となる。爲めに親の勤當を受け、後許されしも火災等の難相次ぎ家絶ゆ。

(同次男) 藤兵衛

富岡町二丁目唐津屋に入家、同町三丁目唐物屋惣左衛門の姉婿なり。子供八人を出す。寛政八辰年七月五日病歿。妻は即ち唐津屋の娘、文化三寅年七月廿一日に逝く。

(同三男) 勝右衛門

大浦村大庄屋小崎家に入婿となる。嫡子定藏それに入藏等子供多し。

(同四男) 藤 藏

小崎家に三年ほど奉公の躰にて居り、後長崎に出でしが、明和八卯年十二月十七日、廿五歳にして彼の地に果つ。

(同五男) 徳兵衛

寶曆八寅年七月十日、四十五歳に而相果つ。戒名澤門良潤信士。之れが家督を請け繼ぐ。

(同長女) ふ ゆ

下内野村清兵衛の妻となり、男子伊左衛門、儀七、民藏を生む。

(同次女) い ち

城木場村庄屋金子半左衛の妻、男子新右衛門、重兵衛を生む。

(同三女)

荒河内村傳兵衛の妻となり、男子豊兵衛、榮左衛門を生む。

(重治の三男)

千山悟徳上座。新休村東向寺に於て出家す。正徳三巳年四月六日十八歳にて病歿。

(同長女)

富岡町五丁目肥後屋に嫁し、長姉、嫡子清左衛門次弟武左

九代 全 千太郎 大正十二年九月六日歿 壽六十二歳

十代 全 榮重

昭和四十四年十一月廿七日歿 壽八十一歳

初代 貞重

松山儀左衛門と號す。其の父祖松山外記は鹿兒島阿久根の生れ、後肥前國南高木郡有馬左衛門佐藤原直純公に仕へしが、元和九亥年貞重三歳の折り病歿す。時しも全年島原城主有馬左衛門尉も、日向國高鍋城主に國替への事あり、貞重未だ幼少の故に御伴成り難く、縁ありて肥後國天草郡富岡城代三宅藤兵衛に引き取られ、直に役所に召し置かる。母も其の際富岡町年寄田中半右衛門へ縁付けられ、貞重のみ専ら藤兵衛の養育に依り成長す。

寛永十四丑年の暮秋、彼十七歳の時にかの天草の亂起り、為に急離三宅藤兵衛の出陣を見るや、彼も亦城代の子息共々本戸村山仁田まで罷り越す。後城代の命の儘子息諸共富岡城内へ立ち帰り、急ぎ城中の固め致し居る處へ、三宅藤兵衛遂に廣瀬村にて討死の悲報に接せりと云ふ。亂平定後子息三宅藤右衛門は、肥後細川公の招きに應じ仕官するに至る。此の折り貞重は暇を乞ふて随伴せず、一時富岡城下へ假寓せしが、更に正保元申中（時に二十四歳）、城木場の地を卜して移住し、一意農を産とし業にいそしむこと廿五

年餘、寛文十戌年十月二日五十歳にして病歿す。戒名義徳院安窓要心居士。妻は肥後國宇土郡宇土町櫻間氏の女なり、亡夫に後る、こと二十八年、元禄十一寅年八月二日に冥す。戒名湖海院瑞月妙技大姉。

（貞重の次男）知行

松山孫左衛門と號し、荒河内村田中郷へ居住。元禄四未年十一月十四日、三十餘歳にして病歿す。戒名清香軒梅窓道薫居士。妻は下内野村庄屋高橋傳左衛門の女なり、孫左衛門若死の故に懸て親里に歸る。

仲に幼き女兒あり、二世重治これを引取つて養育し、成長後富岡町年寄田中宇右衛門に嫁合す。享保八卯年三月四日歿、法名釋乘蓮信女。

（貞重の長女）

富岡町三丁目唐物屋に縁付く、全家惣左衛門の祖母なり。享保十四酉年五月六日歿す、戒名玄荷道圓信女。

（貞重の次女）

富岡町二丁目唐津屋二代目次兵衛の妻と爲る、林右衛門の祖母なり。享保十九寅年六月廿一日歿す、法名釋妙正信女。

貳世 重治

松山儀左衛門と號す、初代貞重の長男として慶安四年に生まる。享保十二未年八月三日七十七歳にて病歿す。戒名一如軒智徳淨園居士。妻は元禄十二卯年十二月二日に逝く、

松山家関係記録

〔解題〕

松山家の先祖は、〔資料五〕の家系にも、かつて肥前有馬の領主・有馬直純の家臣であり、後に、富岡番代三宅藤兵衛に仕えたとある。したがって、一見、城木場城とはなんら関係はなさそうに思われる。しかし、よく考えると、有馬直純の祖父は志岐諸経の兄であり、父晴信などは、度々志岐に来ているので、志岐城の枝城である城木場城とも、まんざら無関係ではない。殊に、松山家初代貞重が城木場村に居を構えたのは正保元年（1650）とあるから、前項に記した金子新右衛門死没の七年前にあたり、このような重要人物の入村に新右衛門が無関係だった筈がない。むしろ、彼の斡旋によって松山貞重は、城木場村に居を構えたと考えるのが順当であろう。

松山家には母屋（本家）の他、数軒の分家があり、現在、本家当主は熊本市に在住である。また松山家の墓地は、一庭融頓開基、松山儀左衛門貞重外護になる荒河内の観音寺にある。ここには、『天草史談』二・三号に紹介された松山家の家系（資料五）と観音寺墓地の墓碑銘（資料六）を載せた。

〔資料五〕 三宅氏の遺臣松山家々系

初代 松山儀左衛門 貞重

寛文十庚戌年十月二日歿 壽五十歳

二代 全 儀左衛門 重治

享保十二丁未年八月三日歿 壽七十七歳

三代 全 儀左衛門 重信

寛保三癸亥年一月八日歿 壽六十一歳

四代 全 次郎兵衛門 盛重

明和六年己丑年十二月九日歿 壽五十六歳

五代 全 儀左衛門 榮重

文化十二乙亥年四月十五日歿 壽七十七歳

六代 全 儀一郎 重隆

嘉永元戊申年八月八日歿 壽八十二歳

七代 全 儀八郎 福重

明治六癸酉年一月十五日歿 壽六十四歳

八代 全 儀七郎 重茂

明治十五壬午年六月五日歿 壽四十八歳

城木場村庄屋金子家累代

〔解題〕

江戸時代を通じて、城木場村の庄屋を勤めたのは、城の北東麓に居宅を構え、城跡の中心部に墓地を持つ金子家である。金子家は初代新右衛門の没年が慶安四年（1652）であることから、おそらく寛永十八年（1641）に初代の代官鈴木重成によって庄屋に取り立てられたのであろう。上田家文書によると、天草では五人衆時代に村々在宅郷士の中から人柄を選んで庄屋が取り立てられ、その後、小西・寺沢時代も庄屋はそのままであったが、キリシタン一揆で散々になったので、山崎時代に庄屋筋目の料明があり、断絶のところは次の鈴木代官までに取り立てが行われたとある。当地については、以前、内野村と呼ばれていて、乱後、町村の改編がおこなわれた様で、わからない事が多い。ただ金子家については、天正天草合戦関係の「天草由来」志岐開城関連の記事に「金子・平井、その他の郎等」とあり、以前、志岐氏家臣であった可能性が高い。したがって、その筋目と人柄から庄屋に選ばれたものであろう。（資料四）には、金子家の過去帳から、同家の累代記を載せた。

〔資料四〕 城木場村庄屋金子家累代

累代	俗名	法戒名	没年月日
初	新右衛門	白峰院基岸淨雲	慶安四年十月晦
二	五右衛門	禪法軒喜悅道智	寛文十二年八月三日
三	新右衛門	松林軒柏翁道庭	元禄九年七月七日
四	半左衛門	親參軒實岩宗悟	享保十年八月四日
五	三右衛門	皎月嘉屋了天	享保九年八月九日
六	助次郎	曉風軒夢堂良寛	宝歴九年三月二十日
七	市右衛門	禪悅軒法山道喜	明和二年八月十日
八	新右衛門	操秀軒松岸真真	天明二年五月二十五日
九	半左衛門	法喜軒禪巖道悅	寛政十二年十一月八日
十	新右衛門	透仙軒鉄関道勇	文化十年七月二十三日
十一	新九郎	榮昌軒鉄道光	文政五年九月十日
十二	茂十郎	円明軒一心寛了	天保七年十月二十六日
十三	半 弥	実雲院心嶽道珠	明治二十六年十一月十八日
十四	襄三郎	明徳院福翁長寿	明治四十年五月二十九日

三世教祐師 元和四年十八歳にして住持を拜命し延寶七年、七十八歳の長壽をもつて示寂。

四世明玄師 實は町山口村中山口千原光水の子、幼にして教祐師に養はれ、十五歳にして住職となる。千原家は、菊池家の支流山鹿出羽守政弘、即ち志岐氏の元祖の後裔で、何時の頃よりか此地に土着し、その後裔今尚ほ存す。師は當寺の中興とも稱すべく、寺門の興隆、檀信の歸依偉大の功績があつた。

五世教壽師 寛文九年晋山、元祿十三年遷化。享年五十八。

六世教白師 延寶四年住持となりしも、向上の一路を辿りて上京し、本山に於て修業すること九ヶ年、將に歸國せんとするに先だち、三十五才をもつて急逝した。

七世教融師 元祿十一年住持、寛文四年示寂、世壽六十四。

八世教專師 三十才にして住職となり、本堂の再建を發願し、東奔西走、享保十年十二月落成をつげた。

九世教明師 若冠父の跡を襲ふたが、延享四年、二十七にして夭折した。

十世見瑞師 栖本村西眞寺より養子、寛延元年住持職を拜命して、本山に詣したが、京都に於て逝去した。

十一世天冲師 八代郡小野村正壽寺より養子、文化五年圓寂。

十二世天馨師 二十二才にして住職となり、文政八年示寂。

十三世公存師 此の代寺記詳かならず。

十四世文龍師 字は石雲、暗香亭と號し、又木石仙人の號あり。學識高邁、最も臨池に巧みなり。郷黨の子弟競ふてその門に集り、所謂名實共に寺小屋の棟範と稱された。

十五世教岸師 この代、祖先の遺志を繼承して本渡町進出を發願し、門徒の協賛を経て明治三十七年現在の地に移轉し、郡の中央に本派本願寺の教線を拡大した。同四十一年、示寂。享年六十九歳。

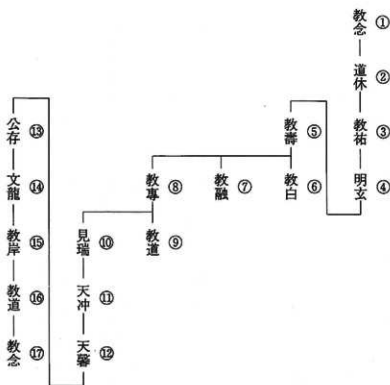
十六世教道師 明治三十四年、父の跡を襲ひ、昭和七年六十一歳をもつて示寂した。

十七世教念師、先代門徒の一部と葛藤を生じたが、これを解決して寺運の昌隆に専念しつゝ、あり。

〔天草史談〕五号 昭和十一年十一月二十五日發行)

十二代目天馨

廿二歳住持ニ罷成、廿三歳ニ御本山血□□ニ上リ、其節不図飛捨官昇進ニ打立、大坂問屋ニテ借用致、首尾能相済申候。比頃者寛政元酉年なり。文政八年酉六月死。右文政八年酉六月六日大往生也。



〔資料三〕

鶴峰山圓覺寺

(本渡市南町六一九)

本渡町鶴峰山圓覺寺は天草郡浄土真宗の寺院として最古の由緒を有する巨刹である。足利時代、志岐氏の一族疏久家、城河原村大字城木場に城を築き累代占據した。その遺蹟は縣道富岡往還の西北方に位する丘陵である。

大永二年、即ち今を去る四百十五年前、時の城主大膳太夫、公用を帯びて上京の因み、石山本願寺に參詣實如上人の行業如法なるに感孚し、一念発得、忽ち遁世出家し、その得度を受けて法名を教念と授けられた。かくて歸國後、城を致ちて梵刹となし、専ら欣求浄土の聖業に身を委ねた。本願寺中興運如上人眞筆の六字名號並に實如上人自筆の御文章は、教念師以來今尚ほ寺寶として保存されてゐる。又實如上人自筆の法名及び傳來の武具等の寶物は、その一部を除く外、切支丹宗徒の迫害に遭ひ、焼失されて今は傳らない。

二世道休師 天正元年父の遺蹟を相續して住持となつたが、城木場の地が僻村にして傳道布教に不便なるを痛感し、天草氏の城下元たる町山口村(本渡町)舟の尾に移轉した。思ふに當時は、天草伊豆守以下切支丹を信奉しつゝ、あつた際とて、師のこの進出には非常の覺悟があつたのであらう。果然、小西行長が天正十七年、本郡の領主となるや、忽ち破却の變に遭遇した。師は、具に辛酸を嘗めて、各所に逃避し、行長滅亡後龜場村大字龜川に地を下して寺基を肇め、寛永二年六十九歳をもつて圓寂した。

八代目教専

坊守は専念寺娘、お銀、寛保元年十一月二十
二日尼ニ成り、法名、妙春、延享二年八月十
六日死去、隠居梅林跡、実子千原見実へ付属

教祐舎弟、千原出進、貞享二年十二月二十二
出生、十四歳、元禄十一年発跡、法名義専、
三十歳、正徳四年住持シ、法名教専

御絵傳享保四年七月十四日御免

団結袈裟 同年七月十二日御免

本堂再興、享保十年七月廿日より同年十二月
迄ニ立

五十二歳、元文元辰年九月九日暮六ツ往生、

坊守ハ福連木村庄屋尾上太郎左衛門娘お妻

正徳三年十二月十二日ニ嫁ス

〇一、惣領お楽、正徳五未年生出、十六才ニて樋嶋
村願乗寺達雪坊守ニ成ル

〇二、お嘉野、二歳ニて享保三年十一月朔日ニ死す
法名妙花

〇三、お益、享保四亥年生出、町山口村鶴田権左
衛門ニ嫁ス

〇四、男 千原智文次、享保六年丑年生出

〇五、海 享保十巳年生出、同村田淵、沢田覚兵衛
ニ嫁ス

〇六、児 享保十三年出生 福連木村庄屋尾上圓右
衛門ニ嫁ス

〇七、賤 享保十七子年生

九代目教道

教専子 千原智文次 享保六丑年四月廿五日
生、九歳 享保十四年六月廿八日ニ鉢発、法

名教明十六歳、元文元年九月ニ住持、法名教
道ト改む 延享四丁卯年八月廿二日廿七歳往

生

十代目見瑞

栖本西真寺新発意、寛延元辰三月廿四日入院
仕教道妹おしつ坊守に定り、見瑞、宝曆四戊

五月十二日京都ニて往生仕候、廿七歳

拾一代目天冲

肥後益城郡河江手水小野村正寿寺三男、鬼
池光明寺取持ニより廿六才ニて 宝曆五年

亥四月廿一日入院仕、坊守、右おしつ、明
和七年寅十月、八代町西光寺より祖師聖人

御前筆六字御名号御請 当寺宝物ニ御成候、
文化五年辰八月十七日死

一、天冲子者傳兵衛、幼年死、三男天馨住持相
続、

二男、良旭、三男、忍成、二十六歳ニ死、
四男、到国京都ニて廿四歳ニて学林ニテ死、

天馨妹ニおのお、高田彦五郎弟益左衛門妻
ニなり

去ス 法名教閑

○四男千原善四郎、町山口村権兵衛娘を妻トス、

女子二人おたつ、大嶋子村武右衛門女房、お

ふし、長崎ニ引越五十三才、延宝二年七月三

日ニ死、法名 教悅

○五番目おかん、当村諸左衛門ニ嫁メ、男子老

人有 俗名左門、後平七と申、鉢發致、法名

常智と申、おかん義三十二歳、天和三閏五月

七日病死ス、法名妙證

○六番目おせき早世ス

五代目教壽

明玄實子本立、寛永十九年に出生ス、廿七歳

寛文九年ニ住持ス

四十三歳、貞享二年の秋、御堂再興致候、

三閏半、六閏、八疊也、

六寸ノ御本尊 御裏ニ寺号 永禄二年巳四月

十五日ニ御免

寺僧太子同断

五十八歳、元禄十三年辰二月廿九日ニ死去、

教壽坊守ハ大嶋子村専念寺娘 お亀尼ニ成リ

法名妙讚、七十八歳、享保七年九月十八日ニ

往生

一、惣領お勝、古江村庄屋水田五右衛門妻

二、亀之助、当寺住職

三、教鈴、元禄五年ニ上京、七年在京ニテ三十歳、

元禄十一年正月三日、京都ニテ死去

四、お春、安養寺了山坊守也

五、常之助、次ニ市郎兵衛ト申 宝永三年八月四

日痘瘡相病死去、法名円心

六、千原傳之進 七代目住職

七、末子千原出進 八代目住職

六代目教白

教圓子、千原亀之助、十三歳、延宝四年十一

月二日に得道、肥前蓮池僧教寺等ニテ学文致

廿七歳、元禄三年より上京、九ヶ年在京ニ

テ其内川内国道場暫相勤メ在京内の弟子八人

有 三十五歳、元禄十一年戊寅三月十九日、

在京ニテ病死

坊守ハ同郡楠浦村鬼塚作左衛門娘、お鶴 禪

入斗ニテ教白死後無間も病死

七代目教融

教白舍弟、千原傳ノ進、二十三歳 元禄十一

年鉢發、同年住持ス

正徳元年居家直作、三十八歳 正徳四年 父

教圓遺言ニテ隠居致、梅林三住居、智祐ト申、

後医名千原見民と名乗り 正徳五年、教興院

御影御開山、御影木仏再興、七月廿五日御免、

尤右願ハ隠居致候翌年住持教專代ニ上京致、

願申請候

六十四歳、元文四年五月十二日九ツ時死去、

〔資料二〕 開基以來圓覺寺代々記

初代教念

俗名碓久大膳大夫、蓮如上人御真筆、六字名号所持

天文五申年、證如上人御代ニ御本尊申請當年開基致、興正寺門徒ニ付：：（以下抹消シアリ）元龜三年ニ死去ス

二代目道休

教念嫡子、碓久佐門、弘治三年ニ出生シ十二歳、永祿十一年鉢發シ、十七歳、天正元年ニ住持致、慶長六丑年木佛御本尊頂戴仕、肥後八代郡野津村勝專坊下ニ付、圓覺寺と名乗り、六十九歳、寛永二年死去

当代迄ハ同郡内野城木場村ニ在寺候の処、本戸町山口村船尾に移居、其後天正年中肥後宇土の城主、小西撰津守御領知の時分、当所へ移住致候

三代目教祐

道休息子、碓久右京、慶長六年ニ出生 同十五戌年鉢發致、元和四年二十八歳ニテ住職、後隠居致梅林ニ居ス、七十八歳、延宝七年八月朔日ニ死去、男子無之 女子二人有、千原氏より養子致、相統仕候、惣領当寺坊守、次女町山口村船尾 有馬市衛門嫁
寛永十四年教祐三十七歳、明玄二十二才、此

四代目明玄

年切支丹蜂起 四郎乱起 当寺御堂、代々の宝物火失致、御本尊木佛、蓮師御真筆、蓮勝ノ六字ノ名号、小幡、三尊繙の御影、御文章 其外宗物少々残り候

教祐養子、俗姓ハ宗元四代孫、大納言隆親苗裔、山鹿出羽守正弘嫡流、千原玄教光弘後胤、千原太左衛門尉光水ノ嫡男 千原龜千代と申、七歳、元和八年ニ養子ニ参り證如上人御判ノ式百所御本尊巻御文巻輔持参ス
十五才ニテ勝專坊ニテ鉢發致住職ス

実子教寿ニ寛文九年ニ寺役付属シ 当村碓ニ隠居、五十九歳、延宝三年卯四月七日ニ死去ス

- 一、正保四年、明玄三十一歳ノ時、御代官鈴木三郎九郎重成、天草禪浄土ニ派ノ寺院建立ニテ当寺近郷の門徒大破、禪浄土ニ改宗被仰付候
- 一、町山口正専寺義ハ元來、肥後熊本延寿寺末寺ニテ候処、延寿寺改派の山口正専寺旦那悉く被取奉、夫より當時門徒に成り、明玄代より支配致候

- 一、お鶴、明玄惣領、一町田安養寺坊守ニ成
- 一、二番目千原多門、当寺住職ス
- 三男千原喜兵衛尉重利、妻ハ權宇土小林氏より女也、廿七歳ニテ寛文十二年四月十一日死

圓覚寺関連記録

〔解説〕

現在、本渡市南町にある浄土真宗西本願寺派鶴峰山圓覚寺関連の記録である。圓覚寺は本文にもある通り、天文五年(1536)、当時、城木場城に在城した疏久大膳太夫開基になる寺で、当時は城木場城の城下にあったと伝えられる。寺跡と考えられる所には、僅かに土塁の痕跡と古井戸が残っているのみである。この寺が本渡に移って、四郎乱(天草・島原の乱)で破却されたことは、本文によって見て頂たい。

また、城木場城が、志岐氏の支城であったとされる証拠として、志岐氏の子孫・平井家の記録に、志岐鱗泉の子・賀右衛門(菊池大八郎)の室は城木場城の疏久大膳太夫の娘であったとする記事がある。この賀右衛門が即ち志岐城下に現存する蓮窓寺の開基になる人物である。

圓覚寺関連の資料としては、(資料一)圓覚寺基、(資料二)開基以来圓覚寺代々記、(資料三)鶴峰山圓覚寺の三点を取録した。そのなかで、基本になるのは(資料二)で、(資料一)は、慶応四年に(資料二)を基にしてまとめられたものであり、(資料三)は昭和十一年に「天草史談」5号に掲載された圓覚寺の紹介記事である。(資料一)と(資料二)は一卷の卷子本に仕立てられ、寺宝になっている。(資料三)は史料とは言えないが、要領よくまとめられているので、そのまま転載させていたたい。

〔資料一〕 圓覚寺基

夫當山開基教念師之俗性ハ其ノ前不分明
疏久大膳大夫、其昔大永二年上京出勤の御撰津国生玉の庄石山本願寺御在院の時、不斗大谷御本願江參詣致シ、宿縁時至発心出家の所願あり、御寺務、實如上人御弟子成り給、法名教念と、殊に武門男長の心を捨、欣求浄土の望ある事を悲哀し給にや、忝も中興運如上人、御真筆、六字御名号大轉今至、并實如上人御自筆ニテ、御文章書通、
今ハ前巻枚除あり、また實如上人より給御真筆ノ教念の法名此外武具等ノ宝物、四郎亂の節焼失、

為師弟輩も仰被下置、今至當山江傳來す、又三尊慈の御影、此ハ疏久家傳來ノ宝物、此又今ニ傳也、

其後天文五申年證如上人御代、御本尊申受、元龜三年二月十三日大往生を被遂ける、

今ニ城ノ古場(其ノ旧跡アリ)テ村人ヨク知ル処ナリ、圓覚寺ノ号御免ハ五世教尊代、御本山山御免書アリ、
以上

右原録雖有之、短略而不詳、代々以傳語基録為助之爾

慶應四年

辰閏四月二十五日

当山小隠

文龍(花押)

付論

圓覺寺関連記録

城木場村庄屋金子家累代

松山家関係記録

ここには、城木場城および城木場村に關係のある一寺一家の資料、計六点を収録した。

鶴田倉造

【既刊資料】

五和町史資料編（その1）『石本家文書録』	平成6年3月刊
五和町史資料編（その2）『下内野城跡』	平成7年3月刊
五和町史資料編（その3）『火筒の響』	平成7年8月刊
五和町史資料編（その4）『近代天草漁業史料集成』	平成8年3月刊
五和町史資料編（その5）『三川城跡』	平成8年3月刊
五和町史資料編（その6）『城木場城跡』	平成9年3月刊

五和町史資料編（その6）

城木場城跡

平成9年3月31日

〔発行〕

五和町教育委員会

〒863-22 熊本県天草郡五和町大字御領2943

TEL 0969-32-1111（代表）

〔印刷〕

（株）大和印刷所

〒862 熊本県熊本市戸島町920-11

TEL 096-380-0303